家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十巻　第九号

お茶の水女子大学
昭和
46. 9. 8
受贈
附属図書館

9

日本幼稚園協会

幼児教育界におくる新書判シリーズ

フレーベル新書

好評発売中!!

◎「フレーベル新書」は、幼い子どもとかかわりのある保育者、父母、学生のための新企画です。

◎あなた自身の……子どもをみる目(児童観)、幸福を願う心(理想像)をもつために新しく誕生しました。

リナはどうやって文字を覚えたか

フリードリヒ・W・フレーベル著
荘司雅子訳　定価　三三〇円

今日、幼児教育界の中で文字教育がとやかくいわれているが、フリードリヒ・W・フレーベルは、百二十年前すでにこのことについて語っていた。

保育者への一つの指針

平井信義・乾　孝・金沢嘉市・城戸幡太郎
八杉龍一＝著　定価　三六〇円

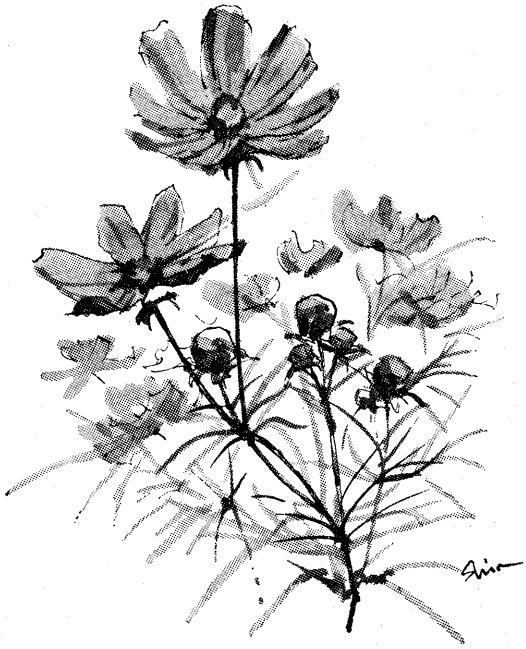
保育者とは、社会にとって何か、子どもにとって何か。また保育者なら誰でも持つなやみまよいについて、選ばれた見識者たちが、あなた自身に語りかける、小論集。

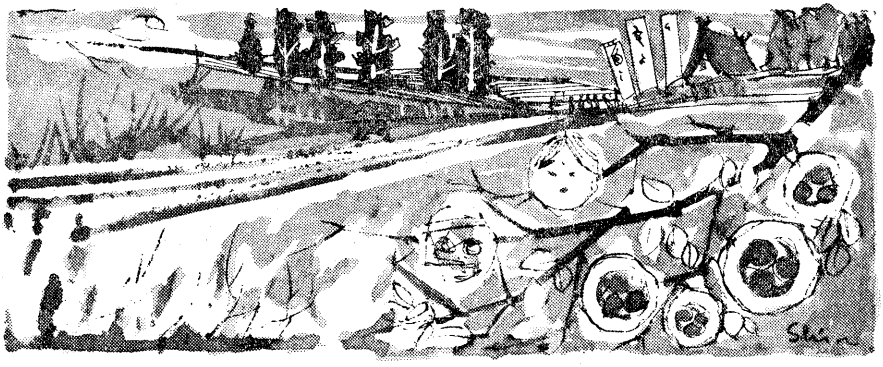
●以下続刊

株式会社フレーベル館

幼児の教育

第七十巻　　第九号





幼児の教育　目次

——第七十巻　九月号——

表紙　小野木　学
カット　斎藤　信也

★随想

アブダーラさんの詩によせて……周郷　博…(4)
時間と空間……柳瀬　睦男…(6)

★講演

発達異常と保育……田口　恒夫…(11)

★座談会
特殊幼児の保育……司会　本田和子…(34)
手先の動きと子どもの感情⑬……清水エミ子…(50)
子どもと動物のふれあい……遠藤悟朗…(59)
子ども動物園で……青木秀子…(64)
短大における保育者養成……原口純子…(66)

随想——アブダーラさんの詩によせて

周郷博

私はめったに
舌を使ったり耳で聞いたりして
コミュニケートするということを
　しない

ほとんど
読んでいるかあるいは
書くということだけで日を
送っている

私が読んでいるときは
もう死んでしまった者が
私と語りあっているし

私が書いているとき
私は
まだこの世に生まれてこない人たちに
話しかけている

これは私が
今このときにだけ生きている
のではないことを証(あか)しするためだ

それなら空間はどうなってる？
私はどこか特定の場所に生きている
ようには思えない

読んだり書いたりしているとき
私は同時に冥想しているから

これが実は私をvoid（空間(すきま)）に生きる
ことを余儀なくし
それを一生懸命にのがれ出ようとさせる

これは、ことし（一九七一年）三月二十四日付のサイン入りでニューヨークから送ってきてくれた、アブダーラ・ナセルディーン（Abdallah Naceredine）さんの第三詩集「いなづま（Lightning）」の59番の詩の訳です。なぜ、こんな詩に

目をとめて、私がまずい日本語訳などにしてここにのせるのか。それは、主として、この詩の三、四、五連をよく読み味わってほしいからなのです。私たちは「もう死んでしまった人」過去の人々と「語りあって」いない。そうして「まだこの世に生まれてこない人たち」とも話し合うということもない。過去からも断ち切られ、未来という（いやでもおうでも「生まれ」「育って」くる者たち）ともつながりが切れている。気まぐれで、「食い散らす」ばかりの「今」この瞬間、瞬間という（ほんとうはそんなものはないはずだ）説明のつかない怪物と同居して日ごとに生命力が消尽しつくされているのではないか。それが「不安」で、いよいよ欲のかぎりをつくしてくたびれてしまっているともいえる。第一、これでは教育が成り立つ基本が根底からくずれている、と私は思った。

ナセルディーンさんは、去年の四月ごろふらっと日本にやってきて、ちょうど、七月の東京の夏祭りのころ、これから、ビルマ、インド、アフガニスタンなどを通ってジュネーブへ行く、といって別れた。そのとき、私たち二人は、四谷見附の地下鉄の駅を「上った」そばのコーヒーの店で会って話した。そのときに、彼は私にこういった、「私は地球だから、いつでもグラヴィテートして(回って)いるんだ」と。私はその言葉にびっくりしたが、彼の第一詩集「自分自身であること Être Soi-Même」の序文を読んでみると、なるほどとうなずけるものが私の胸にきた。

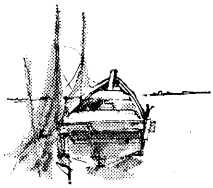
――私の名前は人間（un Homme）という、まったく短い名です。私は、無からやってきて、無へと向かってすすんでいる。私は「自然の子（le Fils de la Nature.）」です。……私は「人生という学校（Ecole de la Vie.）」へ通っている……私の国籍は、人類であり、私の祖国は宇宙です……私の目的は「人類という種に自分を役立つように生きる」ことです。……

まったく、いまの日本人には縁遠くて「なんの寝言をいっているのか！」などといわれそうですが、そういうアルジェリアの詩人と、どういうめぐり合いで知り合いになったのか、ともかくそんな人＝人間がいる、ということを私はみんなに知らせたくて、この短文を書いている。

詩人――ですが、アブダーラ・ナセルディーンさんは祖国アルジェリアの独立戦争のときは、二十歳を過ぎたばかりの青年で、I'ALN アルジェリア独立解放軍の有力な幕僚の一人として活躍した人です。そういう大きな革命の流血の中で学んだものが、こうした彼の人柄と思想（詩）に結晶しているのかもしれない、と私はひそかに考えます。甘えつづけてはいられないそんなものをいっしょに思いたいのです。

時間と空間

柳瀬睦男



一　はじめに

時間と空間の問題について、現在の自然科学的な立場からの考えをのべてみるようにとの御注文でした。そこでなるべく簡単にこの問題を私なりにまとめて皆さんの御参考にしたいと思います。自然科学の分野では、十九世紀末までに完成され、そして体系化された古典物理学と、二十世紀初頭から現在までにつくり上げられた現代物理学との間に、時間と空間についてきわだった考えの相違がみられます。そこで順序として、まず十九世紀末までに体系化された古典物理学における時間と空間の概念についてお話し、次に、現代物理学における時間と空間についての考えが、古典物理学におけるものとどのように違ってきたかをお話ししてみようと思います。

二　古典物理学における時間と空間

近代自然科学の根本的な問題の一つは、研究の対象としている自然の中で、物がどのように動くかという問題でありました。それは、さらにさかのぼっていえば、ギリシャ以来の哲学の根本問題、すなわち存在するものの変化についての人間の問いかけのあらわれの一つといえましょう。近代自然科学が体系的に発達したのは、ご承知のように、ガリレオ以来のことであります。ガリレオの時代、すなわちルネッサンスの時代まででも、もちろん古代

ギリシャから中世を通じて、自然に対する運動についての問いかけがなされなかったわけではありません。特に天体の運動については、多くの事実が観測され、その事実を整理して、科学的な方法論によって導き出された天体の運動の法則もある程度体系化されておりました。しかしそれらがまた、真の意味での科学的方法と、非科学的な判断との混交であったために、物体の運動についての正しい法則までたどりつきえなかったこともまた、事実でありました。

ガリレオに始まった近代物理学の方法論、すなわち実験的な方法論を駆使することによって、近代自然科学は確実に、不明確な方法論によって得た結果を濾過し、ニュートンにおいて、その法則の集大成がなされました。そこに体系化された力学、すなわちニュートンの古典力学の体系においては、あらゆる物体がきわめて簡単な数学的法則に従って運動するということを、確立したわけです。しかしまた同時に、物体の運動は、数量化された時間と空間によって簡単に記述されること、さらにくわしくいえば、空間的な位置を、時間を変数とする数学的関数によって記述するという形式が確立されました。その際変数として使われる時間は、あらゆる物体について、あらゆる条件のもとにそれとは独立に定められること、また空間的変化を記述するために使われる数学的なワク、座標軸も、あらゆる物体について、それとは独立に確定することができるという基本的な原理が前提とされていました。

さらにニュートンおよびライプニッツによって導入された新しい数学的方法、すなわち解析的方法（微分及び積分）によって、事物の運動は、その一般法則を簡単な形にまとめることができただけでなく、その一般法則を個々の具体的な状況にあてはめるための処方が——微分方程式の解の初期条件をあたえるという——ただ一言にまとめることができたという点に深い意義があると思います。つまり、一方において、法則が考えうる限りの一般性をもちながら、他方においてその一般的な方法が、あらゆる個々の現象に、具体的に、現実的に適用できるという点であります。この点がまさに古典力学によって確立された近代物理学の方法論が、いかに強力でありえたかという根本原因にほかなりません。その結果、地上の物体の運動と、天体の運動も、さらに十九世紀の終わりまでには、肉眼ではみえないような気体の分子の運動までも、この唯一の簡単な一般法則と、それを具体的な場合に適用できる処方を持つ解析的な方法によって記述できるようになりました。したがって、その記述の基本になった考え方、すなわち時間は、あらゆる場合に物体とは独立に一通りに定められるということ、空間はまた、物体の運動がどのようにあるにしても、運動とは独立した三次元の座標軸を設定することができるという点に疑いをさしはさむ余地はなさそうに思われました。

時間と空間についての古典物理学の考え方の第二の基本的な性格は、その空間が、ギリシャの昔からよく知られていたユークリッド幾何学が成立するような空間、すなわちユークリッド空間であるという点であります。この点については、実は自然科学だけでなく、数学的な問題がかかわってくるわけでありますが、当時、つまりニュートンの物理学が成立した時から十九世紀に至るまでは、幾何学にいろいろな種類がありうるということは、ほとんど誰も考えておりませんでした。わずかに、不世出の大天才といわれるガウスが、すでにこのことに気がついていたようでありますが、彼は友人への手紙の中に、私がこのことを発表すれば、人々は私を気違い扱いにするであろうから、もうこの発表は控えようと思うといっていたほどであります。そのころまでに人々が、特に物理学の専門家がいだいていた時間と空間についての考えは、それがあまりに自明に思われたために、その基本的な性格に疑問を提出することは誰も思いつかなかったのであります。

三　現代物理学における時間と空間

物理学は、世紀が変わると同時に、まったく思いがけない発展の経験をたどりました。ほとんど自明の真理と思われていた古典物理学の法則では、どうしても説明のできない現象が見いだされ、その現象の説明のために、まったく新しい理論が建設されました。その一つが量子力学であり、他の一つが相対性理論であります。この両者とも、古典物理学そのものだけでなく、その理論の基礎にある考え方に、根本的な疑問をなげかけるようになりました。特に相対性理論の形成にあたって、アインシュタインは、従来の時間と空間に関する考えに本質的な変化をもたらすような理論をつくり上げました。

それは、第一に、時間と空間が、古典物理学で前提とされたように、その運動とは、独立に確定されるということを否定した点と、第二に、空間がユークリッド幾何学によって記述されるという前提に対して、非ユークリッド幾何学という形式を導入する必要をのべた点であります、それでは何故アインシュタインがこの二つの本質的な変革を理論の中にとりいれたかといいますと、一つは光に関する現象についての説明のためであり、他は重力のふるまいについての考察からでありました。

ここでくわしい説明ははぶきますが、結論だけを述べれば、第一に、相対性理論という名前が示すようにアインシュタインが、時間と空間は、物体と独立に存在する絶対的なものではなく、その物体の運動によって相対的に変わりうる量であるということを示した点であります。したがって、たとえば、ことなった地点にある二人の人間にとって、あることが同時に起こったというような言い方が、必ずしも一義的な意味をもち得ないという点を明ら

かにしたことであります。これは、私どもの常識ばかりでなく、人間の存在の根本にかかわる重大な考えの変革といわねばなりません。

人間は誰でも、時間の流れの中心にいるということを感じておりますが、過去は文字通り過ぎ去ったものであり、未来はまだ来ていない、現在だけを我々は現実に存在するものとしての実感をいだいています。しかし相対性理論によると、私にとっての「今、現実にあるもの」は、私に対して動いているはなれた場所の他人にとっては「過去」であったり、あるいは「未来」であったりすることになります。これはもちろん、日常生活の範囲内では、お互いに動く速さ「相対速度」が小さいために、ほとんど判断できないほどの差であります。しかし相対速度が非常に大きい世界、たとえば素粒子が運動している世界では、実際観測にかかるほどの差を生じます。アインシュタインによってあたえられたこの時間空間についての考えを数式化した結論は、今日の物理学者にとっては、少なくとも実験室や宇宙線における素粒子のふるまいにおいては、もはや疑うことのできない確実性をもっているのです。

次にアインシュタインのもたらした、特に一般相対性理論といわれる理論のもたらした、第二の変革、すなわち、ユークリッド幾何学が必ずしも適用できないという点について考えてみましょう。これは第一の点におけるほどの圧倒的な実験事実によって支えられているとはいい難いにしても、少くとも宇宙空間における天体の動き、たとえば水星の運行とか、太陽のそばを通る光の進路の変化などの結果から、私どもの住んでいる宇宙はユークリッド幾何学よりも、むしろ非ユークリッド幾何学によって記述されるべきであるというアインシュタインの理論を支持しているように見うけられます。非ユークリッド幾何学による記述と、ユークリッド幾何学による記述のちがいもまた、私どもの日常経験の中ではほとんど見分けることができないほど微少なものであります。しかし、さきほど申し上げたように、宇宙空間では、はっきりした違いがあらわれる可能性があるわけです。このように、古典物理学で記述される世界は、実は自然現象の中のある一部分にすぎなかったことがだんだんとはっきりしてきました。つまり、素粒子のような、非常に小さい物体の世界運動、また宇宙空間のような、巨大な質量をもった物体が存在するような場所では、ニュートンがきずき上げた古典力学では記述しえない現象がいろいろ起こりうるということであります。

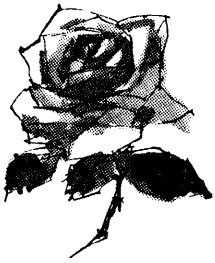
現代物理学のもっているこのような時間と空間についての基本的な考えが、今後どのように変化するであろうかという点については、誰も予想することができません。私どもの知識の限界がさらにひろげられて、素粒子よりさらに微少な物質、あるいは非常に高いエネルギーの領域での現象への探求が進むことによって、

また二十世紀の初頭に起こったような基本的な概念の変革が行なわれないとは、誰も確信することはできません。現代物理学のもっている時間と空間についての考えが、決して最終的なものではないであろうということに注意をする必要があると思います。

四　おわりに

以上のような、自然科学における時間、空間の考えが、幼児の教育にどのように役立てられるかは、しろうとの私にはわかりません。しかしながら、あるいは幼児の生活のパラメーターとしての時間・空間という具体的な問題の取扱いにおいて、あるいはまた―アインシュタインのことばを借りるなら―「認識の冒険」としての近代自然科学の方法論自体のもつ特性の活用においても、何らかの参考になる点があれば幸いに思います。それは、自然科学が、従来の常識や固定観念をのりこえて見いだした、自然の中に秘められていた多くの美しい法則性が、おさな児の中にかくされているかずかずの可能性と同じ源から発しており、またその可能性を引出そうとする教育者の情熱と、自然科学が真理を見いだそうとする情熱の向けられた光が、窮極的には同じ対象に収れんすると信ずるからであります。

（上智大学教授・理論物理学専攻）



告

五、六月号でお知らせいたしました

第一回　みどり会主催夏季研修会は、六月末日しめ切りを待たず、定員をこえましたので、そのあとでお申し込みの方はお断わりすることになりました。

来年も、一そう充実した内容で開催の予定でございますので、今回はあしからず、ご了承くださいませ。

みどり会研究部夏季研修会係

◇講演◇

発達異常と保育

田口恒夫

「発達上のハンディキャップ」や「異常」のある子ども、たとえば脳性マヒとか、難聴とか、それから、どもる子ども、口蓋裂の子どもたち、私は、そういう子どもを見ていて最近感じていることを申し上げようと思います。

ふつうにある〝発達異常〟の考え方、見方

こういう子どもたちについて、今から申し上げますから、全部聞いていただくと「ああそうか」と思われるところもあると思います。脳性マヒとか、ろうとか難聴とか、めったにこういう子どもはいないんですが、こういう子どもたちに、たまたま接してみますと、その子たちに非常によく共通していることがあるんです。

まず、もともと子どもには、何かしら「欠陥」というのはちょっと大げさですが、平均的な子どもと比べると違った面があるんです。そしてそこから先が面白いんです。それについて親は、どうしてよいかわからなくて困る時期があるんですね。保育者としてそういう子どもを預かれば、保育者の方も困ります。これから、児童学科では、赤ちゃんを預かって乳児保育をする計画があるんですが、そうすれば、われわれもきっと困ると思うんですね。

「何だろう。この子は。どうしてこんなに泣くんだろう」「どうして、他の子は泣かないのに、この子だけ泣くんだろう」と、迷

うことがきっと出てくると思うんです。

どうせ人間は、全部赤ちゃんを理解してやっているわけではないので困ることはけっこうなんですが、困った時に、そのわけについて、親が気がつき始める。「この子、ひょっとして目が見えないんじゃないか」「やっぱり、目が見えない」「さあ大変だ」と思うわけです。「この子、ひょっとして足が動かないんじゃないか。動かそうと思っても動かない性質があるんじゃないか」「どうもやっぱりそうらしい」ということに気がつく。

そして、それを〝過大視〟して（適当な言葉が思いつかないので、こうしておきます）――もうそれが子どものすべてだと思ってしまうのです。この子は、目が見えない。目が見えないということは、もう大変なことで「その子は、足は動くんですよ」といっても、もうそんなことに気がつかない。目が見えないことが、その子のすべてだと思ってしまうんですね。そして、そのために何をしようかと考える。「目が見えない子の保育は、どうしたらよいでしょう」「目が見えない子の教育は、どうあるべきでしょう」と、目が見えないということが、その子の名前にかわってしまうのです。

「うちに、良子ちゃんという子がいるんですが、この子の教育計画をどうしましょう」という聞き方が普通ですが、「うちに、目の見えない子がいるんです」というこれがすべてであるかのようになる傾向があるんです。それは人はみな、追いこまれるとそうなるのですね。そうなってはいけないとかいうのではなく、そうなりがちなんです。そして、そのための対策を考えると、すべての対策が特殊なものになり、特殊な訓練になっていくんです。目が見えないから、早く歩かせようとか字を覚えさせろだとか、すべてのやることなすこと、普通の子どもにやっているようなことをしなくなってしまうのです。すべて普通でないことを、せっせとし始めるのですね。

そして、その子は、目は見えないけれどその他のことは、普通の一人の子どもなんですが、普通の一人の子どもとして、その子が必要としているものは、食べ物なんかは食べさせますが、その他の通常な子どもなら、誰だってやってもらっているようなことを、ついやることを忘れてしまうんです。あまりこっちが大きく見えてしまうものだから、目が見えないということしか見えなくなってしまう。そして夢中になって、特殊な訓練、特別な治療はないかと考えて、普通の子どもとしての保育を忘れちゃうんですね。

実際、「この子は、目は見えないんですが、普通の子どもと同じように、一人の子どもですから、少なくとも、普通の子どもが必要としている保育サービスが、この子にも必要です。そのほかに、目が見えないことに対する特殊な配慮も必要なんです。普通の子どもに授けている保育サービスを、この子にも、していただけますか」といって普通の幼稚園につれて行けば「目が見えない

んですか」「目が見えなくちゃだめですよ。もう危なくて」とかいって幼稚園が断わるんです。目が見えないという話を聞いただけで、驚いてしまう。それをその瞬間極端に重大視して、「幼稚園に入れてくれ」というと「とんでもない」というんです。そして、あとからその子は、目が見えないという以外に、どういう点をもった子でしたかというと「ちょっと見なかった。聞かなかった、知らない」というんです。普通の子だったら「身長は何センチ位ですか」「いくつで歩き出しましたか」といろいろ聞くかもしれないのに、その子が、目が見えないと聞いたら、驚いて、他のことは何も聞かないで帰してしまうことになりがちですね。

それで通常な子どもが受けるような保育の機会を与えられないままに成長していく。そして、子どもの成長の上で、近所の子どもたちとグループで遊ぶとか、保育園にいくとか、幼稚園にいくとか、兄弟仲良く何々するとか、そういう集団を通して、普通の子どもが獲得していくようなことは、この子の場合には、しばしば全く与えられないのです。そして、特殊な訓練や特殊な教育をせっせとやられる。親が一生懸命、問題を〝重大視〟して、それに対する対策を一生懸命考えますと、だんだん子どもが、まさに、それそのもの、目が見えないことそのもの、盲人そのものみたいになっていくんです。それよりほかに育ちようがないのです。

そういうことはほかにもあります。たとえば、どもりなんて、こっちが「本当に、この子どもりだなあ」と思い込んで、「どもりだということはたいへんなことだ」と思って、そういう目ばかりで見ていると、どもっている時しか見えなくなる。どもりじゃない時もあるんですが。「パパ、なんとかして遊ぼうよ」といった時には、どもらなかった。「ママ、ママも来てよう」とどもったのだけが聞こえ、「またどもっている」と思うのです。本気でそう思って、それを大きく考えて、それ以外、その子に何もないかのように、そのことを重大視するのです。重大視して見ていると、だんだんそうなっていくという傾向があるんです。おかしくなっていくんじゃないかと思うような特殊な訓練とか、教育とか配慮といったものだけがあって、普通のものがなくなってしまうんですね。そのために子ども自身が特殊化してくるから、世の中の人は、特殊視するようになる。

ろう学校の子どもなんて、手まねをしますが、大塚の駅なんかで、手まねをしていると、世の中全体の人が、その人たちを、今や特殊視するわけですから「きょう大塚の駅でね、おかしな子どもが、手でこうやってね『アー』とか何とか声を出して、かわいそうだね、あの子たちは。いい顔しているのに」なんていう。もともといい子なんです。もともと普通の子なんです。たまたま耳が遠かったのです。ところが「あの子たちかわいそうだねえ。手まねなんかして、明るくしていたけど、おとなになったらどうなるんだろう。きっと、あのまま明るいままはいかないよ。おれたちは、明るくさせておく方針じゃないんだから」とこういういい

方、考え方をして特殊視すると、だんだんその子の成長に伴なって、その子は、普通の社会に適応できないようなおとなになっていくんです。

そうしておいて「なるほど、ろうあ者というのは、しょうがないものだ」とか、「盲人というのは、本当にあんまさん以外何にもできないもんだ」とか、「精神薄弱というのは、やっぱり困るもんですね」なんて、もともと困りものだったようにいうのです。そしてこんなにたくさん困りものがいたら、どこか高崎の山の方に、大コロニーを建てて入れたらどうですかと、そういう〝福祉〟を考えるのです。そして、どこかに施設ができて、「いやそれはけっこうでした」なんていっている。そういうものが共通して、全部そうですね。

のぞましい問題のとらえ方

「これは困った」と思ったら、すぐそれを正しくしていくことを考えていかなければ――。正すということではないかもしれませんが、子どもなんか見てますと、なんとかしなければならないなと思うんです。どこで正すかというと、まず子どもに欠陥がある。たとえば、脳性マヒの子は、少し足が悪いとか、盲という状態で生まれた子どもは目が見えないとか、口蓋に裂のある子どもは、六百人に一人生まれるとか、そういうこと自体は、今のところどうしようもない。そういうものなのです。ちょうど、日本人というのは黄色人種でこれはどうにもならないのですから。もう少し白かったらよかった、黄色人種をなんとかしなくちゃ幸福はこないといったって、何とかなりませんね。なんともならないことは、そのままでけっこうだと思うんです。限界の中で、方法をさがすよりしかたがないのです。

これは、しばしば防げないのです。防ぐための努力は、一方ではしているのですが、重症心身障害児が生まれないようにするために、母親の健康管理をよくしましょうとか、毎月一度、保健所に行きましょうとか、保健所に行くときに、ころんで流産してしまったとか、何をやっているんだかわかりませんが、よかれと思って一生懸命やっているんです。それで保健所が広まってから、重症心身障害児が減ったという話も聞きませんで、やっぱりある種のものは防げない。そうすると、次は親が迷うんです。たとえば脳性マヒの子とか、知恵おくれの子とか、ろうとか、子どもがどもり始めたとか、口の中をあけたら、口蓋裂で、口の中がわれていたとかすると、親がびっくりしてしまう。

親に「びっくりするな」というのは、大変いい考え方です。たいがいの親は当分びっくりするのです。それというのはそういう異常がどうして起こったのかということについて知識がありませんので。私どもに、十分知識があるというわけではありませんが。世界中どこのおかあさんでも、例外なく、「どうしてこんなことが、うちの子どもに起こらなければならなかったのでしょう

か」Why did this have to happen to us？というんです。生まれてみたら、三つ口でした。「奥さん生まれましたよ。だけどね、三つ口なんですよ」「冗談じゃありませんよ。三つ口というのが世の中にいることは知っていましたけど、うちとは関係ないことです。うちの子が三つ口とは」「どうしてうちの子に起こったんでしょう」と思い、誰かに聞こうと思うんです。まあお医者さんに聞くと、「それは、八百人に一人位あるんですよ。それは、ちょっと運が悪かったですね」「運が悪かったといっても交通事故ではないんですから」「何があったんでしょう。何が悪かったのでしょう」「私が悪かったんですか。それとも、主人の方にそういう血統があったんでしょうか。それを隠して結婚したんでしょうか」などいろいろ考えるんですね。そして〝ぎょっ〟としてしまう。〝ぎょっ〟とさせないためには、どうするかということは、一方で考えなければならないことですね。

口蓋裂は、八百分の一であたる。脳性マヒの子どもというのは千人に二人位そういう子どもが生まれるようになっているんです。年賀はがきの三等賞か四等賞位の割で、誰かに当たるんです。その時、「ああ、当たっていましたか。それは」ということになればいいんですが、たいていの人は、びっくりしちゃう。ところが、親がびっくりしていたら、「いやいや、おかあさん、いくらびっくりしても、どうしてこんな子が、うちに生まれたかいくら神さまに聞いたって、先生に聞いたって、大体これは、わからないんです。しょうがないんです」ということを、誰か話してくれて「実は、きょう、日本中に何人の子が生まれて、そのうち何人は、こういう子が生まれているんです。お宅だけじゃないんです」ということを聞くだけでも、ずいぶん気が楽になるんですね。だけど、そういう災害が、ふりかかってきて、世界中が、こんなふうになっているなんて思わないで、自分だけがと親は思ってしまうんです。世の中に、そういう人が、いっぱいいる、そういう情報サービスを作るだけでもずいぶん違うんです。

一日早くわかれば、親は一日早く、子どもの育て方が変わってくる。「あっ、そうですか。要するに今、おっぱいを上手に飲ませることをしていれば、半月後には、こういう手術ができ、一年たてば、なんとかさんの坊やみたいになって、大学へ行くようになれば、何とかさんのお兄さんみたいになる。だから、今は、おっぱいを飲ませることを考えればいいんですね」と思う。そんなことを思いもよらず、ただ子どもを抱いて「どうして、こんなことになってしまったんだろう」と思って、子どもの方はおなかがすいて何か食べさせてくれればと思っているのに、親の方は、腹が減っていることより、口の中をあけて見ている。そこで、誰かが飛んでいって、たとえば「そういうことなら私知っています。この町には、何人いて、なんとかちゃんの坊やは、小学生です。見通しとしてこういうことがあるんです。だから、今あなたがやる大事なことは、こういうことです」と教えてくれる人がいると

いいんです。それが、全然いないんです。誰も、そういうことをしない。ずいぶん薄情なものですね。そういう子どもを育てた人が、世の中にいっぱいいるし、そういう手術をする人も、たくさんいますから、ただの気安めをいうだけでなく、世の中は今こういう状態になっています。おかあさんが、今こういうことを努力していれば、こういうことになります。あなたにやることがある、ということを教える人がいないんです。だから親は、当然あわててしまう。そのことばかり考えていれば、だんだんそうとしか思わなくなってしまうのですね。しょっちゅう、子どもの顔を見ちゃ「困ったな—」と思っています。

子どもの方は、全然そうじゃないんです。三つ口の子なんか、近くに行って「バー」というと、口が「ニャー」とさけたりして、初めは、気持が悪いけど、二〜三時間もすれば、みなさん全然驚かなくなります。三つ口の子の笑顔は、実にかわいいと、本当にそう思えるようになります。「この子は、本当にいい子だねえ、だけど三つ口という個人差が他の子とちがうことである」ということは、つき合ったらすぐわかるのです。本当に、そういうものなのに、親は、そう思えないから、びっくりして、人に見られないように隠すんです。金曜日におばあちゃんが来るというから、こんな子を見られると大変だ。なんとかしなくちゃ。そんなことなかったかのように縫ってしまおうと思うんです。大変迷っている時には、誰も助けにこないんです。だんだん過大視して、そのことばかりしか考えなくなる。そういう時に、「この子も、普通の子なんです。ただ足が悪いんです」「目が悪いんです」という個人差をもっているという適当な〝重みづけ〟、過大評価や過小評価でなく適評価。——目が見えないとは、こういうことです。こういう問題があります。目が見えない以外の点では、このように普通なんです。目が見えないというほかに、人として子どものもっている問題をバランスをとって話をしてくれる人がいるといいですね。すると、親はずいぶん助かります。子どもの方には目の見えない普通の子どもとして保育してくれる人がいなくてはなりませんね。

脳性マヒだと、むやみに訓練させられる。一生のスタートは、訓練また訓練なんです。訓練をする子はいい子で、やる気のないのは悪い子でという鉄則みたいのがあるんですね。そういう生活に、その子は入っていく。そして、本当に、普通とは非常に違った人間に育てられてしまう。世の中の人は、みな、それが一番よいと思っているんです。足の訓練をしたり、手術をしたり、何かそういう普通の子の歩く道とは違う道を歩んでいる。普通の平均的な子どもたちとは、もう顔も合わせずにおとなになっちゃうということが多いです。何とか施設にいて、何とか病院にいって、何とか職業訓練所にいって、十八歳で出てきて、そこで初めてほかの人に合うのです。目の見えない子どもたちだったら、目の見えない子以外の子とつき合ったことがないのですから、目の見え

る人の社会の中で、どうつき合ったらよいかわからないということになるんです。目の見える者は、「なんだ、あいつは、目が見えないのか。めくらか、困ったものだね」と思い、もう本当に相いれないように育てちゃう。だんだん、普通じゃなく育てちゃって、そして、普通じゃないから「だめだ」という差別をする。そういうことは、とてもよく共通していると思います。

こんどは、一つ一つの問題について、簡単に解説してみたいと思います。

◆脳性マヒについて

脳性マヒという言葉は、英語を訳したもので、昔は、脳性小児マヒといってドイツ語を訳したものですが、ふつうの小児マヒというのは、その後ポリオともいいましたが、ポリオというのは伝染病で、脳性小児マヒというと何か伝染病と間違われるので、脳性マヒとしました。

どういうものかといいますと、人間の脳ができてくる——受胎した時はたった一個の細胞だったのが、だんだん分裂して十ヵ月もしないうちにこんなに大きくなる。ものすごいいきおいで「ワー」と大きくなるんです。その途中で、ある種の細胞は、分化して脳になるわけです。その途中では、ずいぶん激しい建設工事が起こっていて、どんどん細胞が分化して、それが、一つ一つがトランジスターのようなもので、その間のつなぎの配線ができて、それができると、みなさんの脳のような構造になるんです。ところが、脳のできる途中で、何か工事の手ぬかりが起こって、セメントが足りないとか、トランジスターの足が一本足りないとか、なにかそういう、体を動かすことに関係のある回路に失敗がおこる。たとえば、ひじを曲げるには、曲げる筋肉には、「動け」という命令を出して、伸ばす方には「休め」という命令を脳が計算して出している。それは、相当ちゃんとした配線図ができていて、どこもショートしていない時だけ、できるのです。赤ちゃんの時は、まだ、その絶縁ができていませんから、手足がいっしょに動いてしまったりしますね。ある種の人たちは、その運動に関する配線を作っている時期に、酸素が足りなかったりしますと、そこのできが悪くなりまして、ひじを動かそうと思ってもちがう方が動いてしまったりしてしまう。そういう仕掛けに脳ができてしまっているんです。脳ができてくる途中、実際には、受胎してから、出産、および出産一～二年後を含めて、その間に、何かわけがあって思うように手足を動かすことができなくなってしまうのです。脳の運動をつかさどる神経回路の配線が、普通とちょっと違う子どもを脳性マヒというのです。

そういう子どもたちに、いくつかのタイプがあります。主な二つをあげると、一つは、痙直型といって、手を曲げようと思っても、いっぺんに、曲げる方と伸ばす方と両方に力が入ってしまい、曲がりにくくなる。曲げようと思っても重たくて、抵抗があ

る。体中の筋肉が、抵抗が強い感じを痙直型というのです。これは、足の方に多いです。もう一つは、アテトーゼ型。これは、どこか動かそうと思うと、思いがけないところが動いてしまうとか、ちょっと緊張すると顔がゆがんでしまうとかです。近ごろでは、こういう人も町を歩いています。普通の赤ちゃんだったら、目の前にものがあったら、手でつかむことができるし、親が、何か持たせれば持つ、すぐできなくても、期間をかければひとりでに覚えていくものです。それが、この子たちにとっては、一生の難事になるんです。目の前のものが取れない。「早く取れ」なんて緊張させられると、こわばってとれない。そういう人たちは、そういうようにできてしまっているんです。顔をしかめてやっても、それがやっとなんです。しかし、とうとう歩けるようになったりする。全然歩けない人も大ぜいいます。寝たきりで、寝返りもできない人もいます。そういうのは、重症児というのです。

こういう子どもは、生まれてすぐ次のような状態です。未熟児であることが多く、痙直型では、生まれてしばらく泣かなかったり――いわゆる仮死状態です。それから黄だんが強く出る。二〜三日目から出て六十日位続きます。また、おっぱいを吸う力が弱い。そこで、おかあさんはなんとかおっぱいを吸わせなくてはと思う。このころは、幸い、脳性マヒだということはわからないんです。わからないということはけっこうなことで、知ったら、もっと驚いてしまう。弱く生まれたとか、早く生まれたとかでなかなかわからないので、一生懸命おっぱいを飲ませているんです。どうやらおっぱいが飲めるようになって、その次に、問題になるのは、運動機能の発達が遅れることです。何ヵ月になっても首がすわらないということがよくあるんです。おしめをかえようと思ったら、足の開きが悪いとかで気がついて、保健所に行くと、「これは、股関節脱臼じゃないか」といわれる。または「整形外科へ行ってみなさい」といわれ、このことで、非常に神経を張り始めるころに「これは脳性マヒです」といわれる。

脳性マヒという言葉を聞くと、親はとたんに腰をぬかしてしまうのです。精神薄弱、脳性マヒといわれて「ああ、そうですか」という人はいませんね。「そんなはずがない。そんなことが、どうして起こったんだろう」と思い、病院の帰りに、どこかに飛び込んで死んでしまおうと思ったりするんですね。大半の人がそう思うのです。それから、もっぱら整形外科のお医者さんの話を聞くのです。整形外科は、ただの医者で、特に、手足の関節とか骨とかの問題が主な仕事です。たまたま足が動かない、首がすわらないということで整形外科へ行くのですが、脳性マヒの人たちは、足が悪い、骨が悪い、関節が悪いのではありませんから、整形外科でなく、もっと脳のわかる人に話をきけばよいのですが、どういうわけだか、歴史的に、脳性マヒを世話するお医者さんがいなかったんです。世話をしている人は、慈善事業なんかで、子どもを預かる人はいたんですが、本当に育てるのにどうしたらよ

いか、本気で考える人はいなかったのです。

整形外科の高木先生という方が、明治時代にいました。私はこの人の直接の弟子なんですが、高木先生が、そういうことをやり始めましたので、日本では、整形外科が強いのです。整形外科医は、子ども全体を知っている人ではありません。関節のこと、骨のことはよく知っていますので、整形外科医がつくったのは、結局子どもの特殊訓練の処方箋なんです。足が悪い、動きが悪い、マッサージをした方がよいだろう。毎日薬を飲ませて、ボディビルみたいに重たいものをのせて、一、二とやるとよいなんて、そういうことを、そのまま、考えるんです。

P・Tという、不思議な商売をしている人がいます。理学療法士といって、この人たちは医者にいわれたとおり子どもたちにやらせるんです。子どもたちは、毎日毎日、痛い思いをしてやっている。「がんばらなくっちゃ大変だよ」「○○ちゃん、ホラおもちゃあげるよ」とおもちゃを上に上げて、それがほしかったら、ここまでとどいてごらんとやって、とどくとまた上へあげて「やっとここまで上った。きょうはここまで」なんておもちゃをかたづけちゃったりする人たちなんです。それを児童学科の学生が見て、「あれはひどい。手を治すために一番ほしいおもちゃでつって、とうとうやらないなんて」と騒ぎ出したんですが、今までは、そういうことをいう人はいなかったものです。保育なんていうのは、この子たちにはないんです。でも収容施設を作ったら、初めて、こういう子たちの保育が必要だといって、それも、ひまな時間に遊ばせるということで、保母の免許をもった人を雇うようになりました。ところが、保母さんが、そういう子どもを見たことがないので、「私はこういう子どもを見たことがないんですけれど……」というと、経験のある医者が、「私は知っているから、私のいうことを聞け」ということで「安全に遊ばせなさい」「ケガをさせないようにしなさい」「むやみに手伝わないで、子どもに自主性を育てなさい」とかいわれてやってきたわけです。

保育者として、この子を見ると、この子どもたちの一日の日課の中で行なわれている特殊な訓練とか指導は、人としてのその子どものパーソナリティーの発達にとって有害だなんていう人は、誰もいないんです。だから、整形外科医は気がつかない。気がつかないから今でもやっているんです。ですから子どもたちは、非常に特殊な環境や訓練でおとなになっていくんです。

どこの幼稚園でも、脳性マヒだと知らないととってくれるんです。「歩きぶりはおかしいけど実にいい子なんですよ」といってとってもらう。とってもらってからはおもしろいことがある。ピョコピョコ歩いていてころびやすいけど、人はいいようだからといって入園させて二、三日ようすを見ていると。「あの子ころびやすいけど、できないこともあるけれど、三日前よりずい分よくなった。音を聞くとびっくりして倒れていたけれど、ピアノをならしてもころばなくなったね。たいしたものだ」と感心してくれ

るようになるのです。見ているとそうなるのです。保育者が見ていればすぐそうなれます。あまり見たことのないものは、びっくりするんです。見たことのないものは、いやなんです。

昔は、特別の訓練がなかったので、普通の幼稚園、学校へ行くものが案外多かったのです。そういう人たちの中で、今、詩を書いたり、本を書いたりしている人もいます。アメリカにも、ずいぶん昔の方ですが、カールソンという人が『この星の下に』という本を書いています。脳性マヒの人が書いた本ですが、この人は、自分自身相当重い脳性マヒで、五～六歳まで歩けませんでした。ところが、普通の学校に行って、友だちなんかに恵まれて、医学校を卒業し、お医者になり、肢体不自由児の施設長として、アメリカの〝脳性マヒの父〟として仰がれています。この人なんか、普通の学校へ行ったからよかったんですね。普通の友だちが、いっぱいいるから、何か困ったことがある時には、いろいろわかる人がいて助けてくれた。みなさんの幼稚園に、もしそういう子が入ったら、よく聞こうと思っても何をいっているのかわからないので先生は困ってしまうと思われるかもしれませんが、三日もすると他の子が、「『お便所に行きたい』といっているんだよ」なんて通訳してくれる。いつも、先生より早く、子どもたちがわかるんです。いつもつき合っていて、人としての気持がわかるんです。そういう仲間がついてくると、中学、高校なんて案外簡単にすみます。そうするとけっこうたいした知恵があるわけでもなく、手足の動きもひどいけれど、今は、立派になってなんとか短期大学を卒業して、仕事をしているという人はずいぶんいるんです。りっぱな活動をして社会人として通用しています。

ところが、今は世の中が進歩していますから、メチャクチャに訓練します。全然違う訓練をするんです。そして、十八歳で終わって世の中へ出ると全然友だちがないんです。どこへいっても、誰も知ってる人に会わない。そして、結局困るともとの施設に戻って、先生に相談する。結婚問題から住宅まで、なにからなにまで、すべて昔世話になった先生のところに行くんです。相談する人が、ほかにいないということです。

私が、昔世話をしていた子どもが、もう二十歳、三十歳になって、昔よだれをたらしていた子がネクタイをしめて、訪ねてきたりします。「ああ、相変わらず無器用な歩き方だなあ。もう少し、何とかなっていると思ったのに」と思います。本当に六歳位の時と、歩き方とか、しゃべり方とか基本的なことはほとんど変わっていないのです。黒人が、なんぼ洗っても黒いように、あれほど訓練しても、あれほど工夫したけども、同じような歩き方をしてるんです。「今でも、しょっちゅう、尻もちをついているか」というと「それは、ほとんどつかなくなりました」とか、聞いてみると、けっこうよくなっているんです。昔は、十メートルごとに尻もちをついて、雪の日なんか、ぐしょぐしょになって家に帰っていたのが、ほとんど雪道はころばなくなったとか、人前

では、よだれなんか出さないですよ、とかいってネクタイをしたおとなになっているんです。

「どういうことが一番不自由か」と聞くと、ほとんど共通して「手足が不自由といっても、それは、もう慣れていますから、それほど不自由ではありません。バスにも、電車にも乗れますし、駅の階段には手すりもありますし、大体困ることはないんですよ」それは、恐るべきことですね。みなさんがもしそうなったら不自由でしかたがないと思うでしょう。この人たちは、前からそうなので、本当に不自由じゃないんですよ。「なんていっていっても、一番困るのは、池袋からバスに乗ったとたん、バスに乗ってる人が、みないっせいにこちらを見る。それが一番困る」みんなが見るとね、みんながいっせいにパッと見ると、歩きっぷりが悪くなっちゃうんです。みんなが見ると、一瞬こわばってしまってそのままデンと倒れてしまうのです。みんなが見たりさえしなければ、まず悩みの九割がたはなくなってしまうんですね。なぜみんなが見るかというと、特殊だから、珍しいからです。本人は見られることが一番不自由なんです。

みんなが見ないようにするにはどうしたらよいかというと、それは自分の家族にそういう弟がいるとか、私みたいに、肢体不自由児施設に勤めるとかして、いつでも見ていると、目の前にいても格別興味はないですね。だから、もう少し世の中の人が、慣れてくれれば、悩みの九割は、解決するんです。あとの一割は何かというと、ペンを持つのに、何とかボールペンはいいけど、何とかは持ちにくいとか、それはちょっとしたことで、程度の問題です。それほど困ることはないですね。なにしろ一番困ることは、みんなが〝サーッ〟と見ること、それからもう一つ困ることは、親が反対することです。職業につきたいから、試験を受けるというと、「いやおまえには無理だ。とんでもない」というんです。結局、子どもが試験を受けて大学を卒業して、フランス語を翻訳する仕事なんかすると、初めて親が「この子にもできるんだな」と思うんです。

外に出ちゃいけないとか、普通の人とつき合ってはいけないとか、普通だったら何でもなく認めてもらえるようなことが、身体障害だからといって、善意から、親やまわりの人にとめられて、させてもらえないことが残念です。それが不自由の残りの一割の半分ですね。本当に手足が不自由で、それで困るということは、まずゼロに近いくらいです。本人は、そういっています。ただ、見たところが、普通とうんと違うものだから、まわりの人がかわいそうがるんですね。

そこで、どうすればいいかというと、親が迷わないように「子どもがちょっと普通じゃなくて、お誕生が来ても首がすわらないとか、二つになっても歩かないとかあっても、それ自体、脳性マヒというのは、そうなんですから」と話してあげるんですね。親が迷って、足の悪いことが、子どものすべてだと思って、むやみ

に特殊視したり、特殊施設に入れたりしないで、できるだけ近所の普通の子どもと遊ぶ遊び方を教える。これが大事ですね。結局、その子がおとなになって困ることは、バスに乗って、パーッと見られることなんですから。回りの子どもたちをそういう人たちがバスに乗ってきた時、パーと見ないようなおとなに育てていかなければなりません。それ以外、子どもの福祉は考えられないですね。

幼稚園のほかの子に、この世の中に、千人に二人は、こういう仲間がいるんだとつき合わせる。子どもは、そういうのをすぐ友だちとして受け入れるもんです。それは見事ですね。「あの子歩けないんだよ」「あの子立てないんだよ」とかみんなで、ワイワイいじめるというか、やるんです。ちょっとやったらひっくり返って泣き出したとか、でも何べんやっても、そんなに面白いことではないので、しばらくすると子どもたちが悟るというか、その子も含めて、もっと面白いことをさがすんです。すぐいっしょに遊べるようになるんです。先生は、あわてて「いじめちゃいけないわよ。特殊なんだから」というけれど、子どもは、あまりそうは思わないのです。みんな寄ってきて、「その足見せてみろ」「あっ、足に鉄が入っている」なんてひどい質問をするんですけれど、「あっこういうふうにできているんだ。だからこっちは、あがんないんだ」とか「誰か手を貸さなければいけないよ」とかわかるんです。そして一週間もすると、その子の家に迎えに行って、乳母車を押すのは誰だとか、かつぐのは誰だとか役が決まって、けっこうみんなで、ワッサワッサおみこしみたいに、かついできたりする。野球をする時には、その子をキャッチャーにするとか、なんとか遊びの時は、どこにすわらせるとか子どもが考えるんです。

子どもたちが、仲間として、この地球社会の仲間として、自分たちの小さな幼稚園のクラスの仲間として、その子を受け入れて、やっていくのです。自分の家に、そういう子がいればやはりそうなる。お兄ちゃんは、速く立派に走るけど、実は、弟は、重症心身障害児だから、遠足に行く時は、行きは、おとうちゃんがかついでいくとか、帰りは、お兄ちゃんとママがかついだり、抱っこするとか、分担ができる。そして、その子は、その子なりに役割をもって、荷物の番をするとか、その子なりに遠足を楽しむのです。家庭という一つのグループで、その子をどうするかということが考えられる。その子が、いない方が都合がよいなんていう処理の仕方をすることはないんです。幼稚園とか学校は、いない方が都合のよい子はいいですと断わるんです。地球社会には、絶対いるわけです。それなのに、その子がいないかのように、幼稚園を作り、小学校を作り、大学を作っているのです。そして十八歳位になって、やっぱりいましたからというようになる。もうそうするとつき合えないんです。めんどうの見方がわからないので、善意はあっても、何してよいかわからないのです。

一番よいのは、だまって放っておいてジロジロみたりしないこ

とですね。誰も助けてくれなくっても別になんとも思いません。ただひっくり返りそうになったら、足を出して足をささえてあげればいいのに、ひっくりかえるまでみんな見ている。本当に最低のことしかしないんです。つき合ったことがないからです。子どもの時から、そういう子を交えて、相撲をしたり、サッカーをしていれば、そんな時、自分の方に倒れてきたらささえてやることを体得していれば、そういう人が、本当に助けを必要としている時に、「よし、それじゃ今、助けるから」という社会人になれる。

「小学校にあがった時に、クラスにそういう人が一人いて、いつもその子の足をもつとか、乳母車に乗せるとかしていたから、どういう時に、つっぱるか知っています」というように、知っている人がいれば、適切なお手伝いもしてくれるでしょう。少なくとも、ジロジロ見て、いやな思いをさせることはなくなる。そうすると、その子たちのもっているトラブルの九割はなくなってしまうのですね。

そういう子どもの集団指導ということを、池袋の肢体不自由児協会で始めました。通常の保育園や、幼稚園で行なっているのと同じように、手足の悪い子どもたちにも遊べるような遊びをしたり、その子たちが参加できるようなプログラムを考え、この子どもたちの行動そのものが伸びていくことを考えて、保育者が動いています。それは、本当に、ただの遊びなんです。何ヵ月も何ヵ月もやってもできなかった手の機能が、その中で、できるようになったりするんです。考えてみますと、子どもの運動機能は、子どもが本当にやろうと夢中になってやった時だけ、覚えられるものであって、一、二と歩き方を教える。まず右足を出して、曲げてといわれて覚えたなんていうことは、あまりないんです。夢中になって、他の子とキャーキャーいって、ころばされたり、ころがしたりしているうちに歩けるんです。今まで、訓練でできなかったことが、ひょっとできるようになる。しかも、顔つきが明るくなって、友だちと遊べるようになるんです。おかあさんにくっついてばかりいたような子が、全然そうじゃなくなり、明日も幼稚園に行くんだと、はりきって、前の日から用意したりしているんです。

脳性マヒの子たちが、何を必要としているか、よーく考えてみると、普通の子どもと同じことを必要としているんです。普通の子どもと同じことだけすると、その子たちの今もっているハンディキャップの九割位なくなります。脳性マヒでない同年の仲間たちが、脳性マヒに慣れて、いっしょに話したり、幼稚園に行き、高等学校に行って暮してくれれば、障害の九割かたはなくなるのです。一般の常識としては「字が書けない、すわっていられない、立つこともできないなら、学校に来たってこれはとうてい勉強になりませんよ」と先生がいう。でも、学校って何のためにあるか、よーく考えてみることが必要ですね。そういう子どもであっても、運動会にも、遠足にも、学芸会にも参加する。その子を

含めた運動会がいつも企画されることになるのです。そうすれば、おとなの身体障害者でも、地域運動会に参加したりして、そういう人たちが参加できるものを考えた方が、より有意義ですね。子どもが、やり方についてまっ先に考えるんですね。それをおとなが、異常な人間はだめなんだと初めから分けているから、子どもたちは、つき合い方を、覚えないでおとなになってしまうのです。

◆「ろう」について

ろうというのは、耳の聞こえない連中で、耳が全然聞こえないと思われるかもしれませんが、たとえば大塚のろう学校に行くと、全然聞こえない者は、学校の中で、百人のうちふつう三〜四人しかいないんです。ほかは、みんな少しは聞こえるんです。しかし私どもの話す言葉は、聞こえない。人間の耳の聞こえる最大の音は、たとえばジェット機のバーッというのから、うんと小さな音までですが、その子たちは、音を大きくすれば聞こえるんです。汽車なんかのバッというのは、まっ先に聞こえます。低い大きい音は聞こえるけれど、われわれがしゃべっているのは聞こえない。子どもの時からそうなんです。言葉をしゃべることを覚えないからろうあ者は手まねになる。当然そうなるのです。人間の耳に聞こえる音の聴力図というのがあって、図に示せます。

ピアノの一番左側の低い音、ブーンというのと、一番右のピンというような高い音は、感じ方が違うんです。年をとってくると、だんだん、ピアノの右の方から順番に聞こえなくなるんです。耳が遠くなるということがあります。「うちのおばあちゃん、どうやら近ごろ耳が遠いようだ」なんて話していると「そんなことありませんよ。私、よく聞こえていますよ」なんていわれてびっくりしちゃう。案外ボソボソいっているのが聞えるんです。それを、ささやき声でいうと大体聞こえないんですけどね。そういうのも高い方の音がよく聞こえないんです。ローマ字でObā chan と書くと下線を引いたところが、聞こえないで「おあーちゃん」というように聞こえるんです。

もしこういう状態だと、補聴器というイヤピースを耳に入れて、ポケットにたばこ位の大きさの機械を入れておくと、音を大きくしてくれるんです。

赤ちゃんは、生まれたばかりの時から「バア」だとか「ウーンよしよし」なんて、いわれて育つんです。一年間さんざん言葉を聞かされて、はじめて、「パパ」とは親父のことだとか言葉がわかるようになるのです。ですから、こういう聞こえない赤ちゃんは、生まれて最初の一年間に聞いた言葉は、この子の聴力では入りませんから、あやしてもらっていても、その子は、あやしてもらっていなかったのです。全然聞かなかったのと同じです。だから、満一歳になっても、言葉がわかるようにならない。「パパは？」といっても「ニヤッ」としている。ところが大部分の親は、赤ち

ゃんの前で「パパは?」といって、赤ちゃんが「ニヤッ」とすると、こっちが何をいっていたか忘れて「ああうれしいの」なんていうことになる。この子は言葉がしゃべれないんじゃないかなどという不安をもたない、気がつかないのです。だから、二歳位になってものをいわないということではじめて気がつくのです。ところが、二歳で気がついても、もうまる二年損をしているわけです。それから補聴器をつけても、うまくいっても二年遅れでしかないんです。

ろう学校は、六歳から入れます。東京あたりでは、幼稚部に三歳から入れますが、三歳から入ってろう学校に行くと、学力をみると、平均すると、小学校の四年か五年位。せいぜいよくて中一ぐらいです。三歳で入ってきて、はじめて、世の中には言葉というものがあるのですよ、と教えられるのです。世の中の人は、何か、顔を合わせると口をパクパクしている。ニヤニヤしたり怒ったりしている。ふしぎなもんだなあと思っていたんですが、その時、音が出て、意思の交流をしていたなんてはじめて知るわけです。そういうわけですから、だんだん追いつきにくくなるんです。

どうすればよいかというと、何が起こるか注意するのです。赤ちゃんが、むやみにおとなしいと思われる。まあ、泣いたり、手足も動かしますが、自分で声を出して、一人で楽しむということをしないのです。生後四ヵ月から九ヵ月のころおもしろい、珍しい音とか、ものを見ると、「パッ」とそっちを見るという行動が、非常にはっきりあるんです。たとえば、抱っこしている子の頭のうしろで、紙をぐしゃぐしゃすると、たいていは、ハッキリふり向いて見ます。八〜九ヵ月になると、どの方向から来る音もすぐ見つけます。気がつきにくいものですが、ちょっとこの子、耳が聞こえないんじゃないかと思って見ることが大切ですね。この時期に誰か慣れた人が見てくれれば気がつくんです。赤ちゃんが生まれたら、四〜九ヵ月の間に、そういう修練をつんだ人が、耳の反応をみるといいんです。そしておかしいとわかったら、その時補聴器をつけてやる。まだ、はったり、おしめをしている子が、背中に機械をつけて、両方の耳にしています。耳は二こありますからね。日本では、経済的な理由で、一つしかくれませんが、イギリスなんかでは国は貧乏でも大体二つくれます。

四ヵ月位で補聴器をつけると、言葉の大半は聞こえるんです。一部は聞こえないかもしれませんが。「バアー」というのが「ウアー」位には聞こえる。聞こえると、「ウアー」なんていう子になるんです。そうして、ろう学校で「ウアー」じゃなくて、こうですよ、こういう音も入っていると教わるのです。発音の仕方を教えるということは、そうむずかしいことではありません。これは、全然世の中には、言葉があるなんていうことを気がつかないで過ぎてしまうのとは、大変な違いです。この時期に発見できずに、三歳でろう学校に入り、そこではじめて言葉の教育を受け、

言葉を覚えると同時に、勉強も習うとなると、結局は、学力が中学一年、あるいは小学校四年程度のおとなになるのです。普通の成人とつき合ったことのないふしぎなおとなができるわけです。

以前そういうおとなたちの収容施設に五年ばかり勤めていましたが、そういう人たちの楽しみはというと、結局、世の中の普通のおとながしているようなことをしたい、洋服なんか最新流行のものを着たくてしかたがない。働くこともできますし、身体的には正常ですからみんなと同じようなスカッとした服を着て、喫茶店に入ったり映画を見たり、そういうことが大好きです。そして、大体が、洋画を見るんです、日本画はよくわからない。洋画は字が出ますし、わかるんですね。そして、なるべくしゃべらなくてすむようにしている。道で誰かに会ったり、人から、「もしもし、ちょっとおうかがいします」なんていわれると大変困るのです。切符なんかも、買う前に字を書いたりしています。いっても、わかってもらえない。驚かれてしまう。ろう学校で習った通りにやっても、通じないんです。ろう学校の先生はわかりますから「よくできました」なんてほめられて、いい気になって卒業するんです。そして卒業したとたん、そういって、駅員に驚かれてしまう。今は、便利になっていて、しゃべらなくても、切符が買えるようになっているので、小銭さえもっていれば、大丈夫で、外出も楽になったようです。

この人たちが困るのは、しゃべれる連中に、言葉でしゃべられた時ですね。手まねをして「私はしゃべれません」というと、相手は、うんとびっくりするか、全然わからないかどっちかなんです。そして、しゃべれる人は、全然手まねを理解してくれないのです。ろうあ者のいうことは、わかろうとしないんですね。そして自分たちは、しゃべれる日本語をペラペラいっている。それは、ろうあ者には聞こえないのですから、もう何といっているか、厚い鉄のようなものの前に立たせて、くやしかったら乗り越えろ、くやしかったら言葉がわかるようになれ、しゃべれるようになれと世の中の人が要求しているんですね。しかし聞こえなかったら覚えられないのですから、ろうの人なんてかわいそうです。自分がわからないことが要求されるでしょう。「けっこう、けっこう」といわれて、ろう学校を卒業して、社会に出て、切符を買おうと思って「し・な・が・わ」といってみても切符がこないのです。なんだか、だまされたようですね。よく聞くと「しながわ」と発音はできているんです。ただ立派な背広なんか着た若い人が、窓口で、気が狂ったような声を出すので、むこうは、たまげてしまうのです。

ほんとうに、ろう児が、みなさんの仲間にいて、自分の子どもだと思えば一番いいんです。その子どもが幸せに暮せるようにしたい。何をしたらよいか考えるんです。アメリカ人はそうです。一歳までに発見して、補聴器をつけて、言葉がわかる、聞こえる状況で育てることが必要であれば、金をそれにつぎこみたいとい

う。だから、百万ドル使っていいといわれて、そのうち五十万ドルをそれに使い、残りの五十万ドルは、ろうでない人に、ろうの人とつき合ってもらおうことを知ってもらうために使いたいといっています。

何日でもよいから、ろうの子を普通の幼稚園に入れなさい。そのために、普通の幼稚園が、被害をこうむるとか、めんどうみきれないとか、いつ外に飛び出してしまうかわからないとか不安があったら、その子に専属に先生をつけましょう。その費用は、政府が出しましょう。そういう体制にして、なるべく手を出さず、普通の子どもと同じようにするのです。デンマークなんか、一生懸命国として応援してやっていますね。ろうだったり、盲だったりしますと、二歳の時、もうおかあさんが、目の見えない子や、補聴器をつけた子どもを、保育園へ連れていく。そして、他の子どもたちが、遊んでいる中を、ふらふらしてるんです。みんなが、ピアノのまわりで、歌を歌っている時、ろうの子どもは、うしろにいて、うたっている子の顔を見たりしてるんです。一般の人間の子どもが、どういう暮しをしているか、どういう遊びをしているか、どんなことを楽しんでいるか、なんとなく、はだで感じるだけでもその子たちにとって得になるんですね。

その保育園で、「それではみなさん、歌を歌いましょう」「ああやっぱり、あのつんぼはやっぱり歌っていないね」そんなことはいわないで、その子が歌っている子どもたちの間を歩いて、顔を見たりしていて、みんながキャーキャー喜ぶとニヤニヤしたりしているだけで、その子のためにはなっているんです。他の子どもたちが、耳の聞こえない子は、こんなもんなんだよ。うしろからね、「なんとかちゃん、あぶないよ」と呼んでも、こっちを向かないんだ。だから、急いで肩をポンとたたいて「あぶないよ」というとすぐわかるよ。そういう術を覚えるんです。その子とつき合う方法がわかる。ろうの子は、普通の子がいうのをどのようにキャッチすればよいか術を覚える。「ハァー」と見ていると、その子が指をさすから、そっちを見るとか、いろいろ頭を働かせるとかして、こんなこといっているんだろうとわかるんです。からだでそういうことを感じるようになる。そうすると、いっしょに小学校へいっても、あまり困らないで、先生がペラペラといっている間に、先生がこうしろといっているんだとか、自分のノートを見せてカンニングをさせたりしています。普通の子にカンニングのさせ方、ろうの子にカンニングのしかたを教えれば困らないのです。そして知能によっては、大学を卒業していくのです。

先生が「きょうは、脳性マヒの話をします。」といっても、ろうの人にはわからない。わかるわけがないのですが、その時、指さしたり、わからないから書いてくれないかと、小さいころから、そういうことをしていれば困らないのです。なにしろ聞こえている連中とつき合ったことがないともう困ってしまうのです。困ることがあると、昔のろう学校の先生の家へ相談に行く。だから、日

曜日になると、いっぱい来ちゃう。そこが、オアシスで、そこに行くと自由に手まねができるんです。そして、みんな喜んでうれしがって聞いてくれる。それが町で、一発こんな手まねをすると、まわりの人が、ちょっとバカじゃないかといって、見るでしょ。だからおっかなくてしかたないから逃げているのです。どうしようもないですね。

親たちが、びっくりして、小さいうちから、訓練、訓練、発音練習しなくちゃと、一生懸命やって、近ごろ「おっあーさん」といえるようになった、けっこう、けっこうと喜んでいる。しかし、結局、まわりの人が「おっあーさん」も「あっ、そう、おかあさん」と聞いてくれればそれもよいのです。それが、普通のおとなは、ろうあ者だとわかったとたん、もう聞く気もちなんかないんです。ろうあ者なんか気もちわるい、つきあいたくないと思っていれば、せっかくいっても聞いてもらえないのです。特殊な訓練だけをして、普通の子どもと遊ぶ機会もないし、普通の保育を受ける機会もないと、普通の子どもたちと、どうふるまっていいかわからない子になってしまうのです。

十八歳になって初めていっしょになる。十八歳になったら、慣れている仲間だっていろいろ遠慮するのがでてくるのですから、全然会ったこともない人にパッと会って、「これが、おまえのところの工場長だ、この人のいうことを聞いて働きなさい」といわれても困ってしまいますね。「これどうしたらいいのかなあ」と思っても、ちょっと聞けそうにないので、多分そうだろうと思っていい加減にやっちゃうんです。すると、工場長が見て「だめだねェ。ろうあ者はこういうでたらめをやって、これで会社は何千円損だ」とか、その人に直接いわないで、ろう学校の先生に、こういうのは困るといいつけるんですね。目の前で「こういうのは困る。全然でたらめなことをして、こういうのは社会性がない」といい、結局首になって他の所へやられてしまうのです。それが、たび重なってくれば、自分は、だめな人間で社会適応が悪いと思ってしまうのです。

そうすると、何か福祉対策を考えろと、ろうあ者連盟が自民党に陳情に行ったりする。そして、自民党が、ろうあ者コロニーを作ろうという。すると、そのコロニーには、普通と同じ洋画の映画館があるか、喫茶店があるかなんて聞くんです。こういうのは、町に行かなきゃない、というと、それじゃおれは入らないというのです。コーヒーを飲みに行ったり、ものをいわなくてメニューを見せてそれを飲んで洋画を見て帰るのが、幸せなんです。「どちらもないけど、ろうあ者の天国です」といわれても、本当は、うれしくないんです。本当は、みんなといたいと思っているんです。電車に乗ってすわっていれば隣りに女の子がすわったりして、「まさか、おれがろうあ者だなんて気がつくまい」と大変いい気持になっているんです。もし気がつかれたら、大変だ、という気持がいつもある一方、「自分はちっともおかしくない普通の

おとなだ、文句があるか」という気持もあるんです。それなのに、もうこの世の人でないような生き方にさせたのは誰か？

特殊な訓練、特殊な子どもだから、特殊な訓練が必要だと、特別なところに入れて、特別な人間に仕立てあげてしまった人たちです。よく見ると、その子は、初めから、ただ耳が聞こえない普通の赤ちゃんであったのに、それが、いわゆるろうあ者というレッテルが貼られて、まるで、人間の子どもでないように扱われちゃうのです。そのように育てられるのが、今の社会です。その始まりは、幼稚園ですからね。

幼稚園の先生とか、保育園の先生とか、子どもの世話をする専門職で、最初に、その子に出会う人は、その子どものことだけ考えて、その子の特殊な訓練を十八年やって特殊性をなくしてしまおうなんて思ったってだめなんです。ろうであったら決してなおるものでない。脳性マヒだったら、脳性マヒというのは脳が作られてくる間のことだから、なおるなんていうことはないのです。病気じゃないんだ。そういう子どもなんだ。足が一本ない子どもはずっと、足が一本ないんです。足が一本ないから、もう一本はえたようにしなくちゃいけないから義足をつけて動くようにして、まるで、足があるかのように見せかけている。「十八年訓練して、とうとうこの子は足があるかのように歩けるようになったぞ」なんていっている。ところが、この子は、世の中の足の悪くない人とつき合ったことがないようになっていて、足があっても、世の中に適応できないようなおとなになっている。一方、足がなくても、うまく適応できるおとながいっぱいいるんです。

ろうに関しても、脳性マヒで申し上げたような同じことがたくさんあるんです。ヘレンケラーは、ろうで全然聞こえなかったけど、大変立派な社会生活をしていましたが、ろう学校を卒業していないんです。まったく耳が聞こえないけど、普通の小学校に行っている子が、今、東京で一ダース位います。その子たちは、幸い赤ちゃんの時は聞こえていて、三〜四歳で結核性脳膜炎で、ストレプトマイシンを背中にうったら、耳が聞こえなくなり、全然聞こえないんです。その子たちは、幸い、最初に幼稚園に入っていて、病気をしたので、まったく聞こえなくなったけど、次の年の春には、歩けるようになって幼稚園に行くと、先生が「ああ、なんとかちゃんよかったね、生き残って」というんです。「耳が聞こえなくなったから幼稚園はだめですよ」なんていいにくいからです。

この前までいたから、おじぎだってしてくれて、本当に、言葉がわかっているんじゃないかと思うんです。しかも、子どもは人の顔を見ていて、けっこういうことがわかるんです。大体幼稚園の先生のいうことなんか決まっていますからね。「〇〇ちゃん、おはよう。きょうはよいお天気ですね」というだろうと思って「おはようございます」なんておじぎをすると、おや、この子はわかるのではないかと思うんです。今にしゃべれるんじゃないかと

思う。聞こえると思ってやっていると、だんだん普通の子どもと同じと思えるようになるんです。ただおかしいことに「〇〇君」といってもこっちを向かないことで、それが困るくらいで、あとは普通ですよなんて、幼稚園の先生が固くそう思っていて、そういうと、小学校でも、教育委員会が、幼稚園の先生が二年見ていてそういうのだから、入れてみたらどうだいということで普通の小学校に入るのです。そして、幼稚園からいっしょにあがってきた子がみんなで、カンニングで、その子に教えるのです、その子もみんなを見ていて、みんながサーッと向こうへ行くので、自分も行ってみたり、わからなくなった時は、まわりにちょっと気を配るでしょう。耳が聞こえないけど、そういう生活の知恵があって、けっこう普通の小学校でやれるのです。宿題もよくやってきますし、試験もできていましたと、大体において評判はよいのです。そして、結局、大学にスッとパスしたりしてます。そういう人は、普通の学校を出たので、仲間がいっぱいいるでしょう。ビートルズみたいなグループを作って入ったりしている。補聴器をつけて、なにか音がブンブンといっているのがわかるのでしょう。

ところが、ろうあ者は特殊だと、職業訓練所や、ろうあ者施設を作って、せっせと訓練したって、だめなろうあ者だっているんですからね。普通に育った子は、仲間といっしょに髪を長くしたりして、ギターを弾いて楽しんでいます。就職といえば、あっちにも、こっちにも、友だちが何とか自動車修理工場にいるとかいって、そこで使ってもらうといって行くのです。すると、お前は、器用だからエンジンの方をやってくれとか、社長さんも、小学校からの仲間で知っていて、あいつは、耳が聞こえないけど、学問はあるんだとか、電気のことは詳しいとかいろいろ知っているので、気やすく使ってくれるのです。ところが、普通の自動車修理工場に、「一人、とても優秀なろうあ者がいます。手も器用だし学もありますから、使ってみてくれませんか」といっても、「ろうあ者ですか、それは困るな。ちょっと位足りなくてもいいから、普通のにしてくれ」といわれるのが常識ですね。どこへ行っても受け入れてくれないので、不適応をおこして、まわりの人とまずいことを起こす結果になる。

すると政府は、ろうあ者の成人のために、福祉対策を立てなければといい、いろいろ施設を作るのです。一生、そこで暮らすことになるろうあ者もいるんです。うちの家族の構成員みたいに、あなた方も、日本の国民、何とか村の住民として将来とも私たちといっしょにやりましょうというプログラムが最初からあればいいんですがね。ろうあ者といっても一風変わったとこがある、実におもしろい普通の人たちなんです。ところが、世の中は、そうじゃなくて、だんだん普通じゃなくしているんです。特別な施設などを作って、そこに入れれば一番の福祉だと思っているんです。

◆知恵の遅れている子どもで、言葉のしゃべれない子どもについて

幼稚園の入園テストをすると、「オタカナ」「テエビ」など、まだ発音ができていない子がいます。幼児音をしゃべる子どもが、どういうふうにすれば普通にしゃべれるように育つかというと、まず幼児音でない、ハッキリした発音を、現実の場面で、鮮明に聞かされる場面が多くなるといいのですね。すいかの「す」「あっ、ぼくのすいか」とかたびたび入ってくる方がいい。一方、自分でかってにいう機会が多いとよいです。しゃべっている時間だけが言葉の練習時間になるわけです。しゃべらない時間は、発音の練習にならないんです。みなさんの英語がちっとも上手にならないのは、そのためかもしれません。

朝から晩までなんでもいいからしゃべっていれば、一ヵ月でもう少しよくなるかもしれません。しゃべらないと言葉は直らない。子どもにとって、一番聞く機会が多くあって、しゃべる機会が多いとすると、それは、他の子どもたちと遊んでいる時とか、幼稚園の遊び時間なんかです。だから、幼児音をもった子が、幼稚園に入れてもらえば、うんと得をして卒業するのです。入れてもらえないと、それをさせてもらえないのです。

十分よくしゃべれて、言葉も普通の子は、そのままで順調に発達するのです。六歳になれば、普通の小学校に行くのです。普通の子でも幼稚園に行けば得をしますが、この子たちと比べたら問題にならないぐらいの大きさなんです。本当に、お茶大幼稚園に入る時に優秀だったら、幼稚園に入らなくてもいいくらいのものです。最も保育を必要としている子どもから最優先で入れる、耳が聞こえない子どもは、聞こえる子といっしょになることが大切だから、一番に入れる、それが理屈にあっていますね。児童科の先生はみなこういうことをいうから嫌われてしまう。

◆どもりについて

親が「どもりだ」と思って騒ぎ始め、本気になって心配すると本当のどもりになるのです。なんだかうちの子は、近ごろいい方があわてているねと、親がたいして気にしていないと、同じようにどもっている子どもでも本当にどもりになっていかないという傾向があるんです。近ごろそれがはっきりしてきました。ほとんどすべてのどもりは、二歳と四歳の間で始まります。幼稚園の三年保育で、最初の年の二十〜三十人に一人位は、「お、お、お、おかあさんがね」という。すると先生が「これは、どもりだ」と心配しちゃう。心配すると、その気持が子どもに反映して、先生、なんだか深刻な顔をしてぼくのことを見ている、自分が好きじゃないんじゃないかと思って、だんだんまずくなるんです。その先生の近くに行くと、うまくいわなきゃいけないんじゃないか、先生をギョッとさせないようにしなきゃとか気をつけたりす

ると、本当におかしくなるんです。子どもにとって先生に好かれることが一番の幸福ですからね。気をつけるとまずくなる。すると「これは、どもりじゃないか。どもりのはじまりだ」といって過大視する。

その子のその他のことを全部忘れてしまって、どもり始めたことだけが、自分の頭にあって、先生も親も関係者も、どもりだけが見えて、その子どもが見えなくなった時、その子は、本当のどもりになるのです。一般的にいうと「この子は、本当にいい子だな」と思っているといい子になるんです。だから、幼稚園の先生に一番大切なことは、子どもを見て「本当にいい子だね、この子は」と思えることでしょうね。本当にどもりだと思うとどもりになるんです。

◆口蓋裂、三つ口にいて

口蓋裂というのは、口の天井が全部さけていて、三つ口なんかといっしょにおこります。口の中の構造が違うので、言葉を覚えられないのです。でも幸い、近ごろは、しゃべり始める前に、手術して、口蓋裂がない状態と同じにできるようになりました。医学的処置をやるべき時にやりさえすれば、問題が起こりません。これからは問題にならなくなるでしょう。

それでも親が迷って、口蓋裂、三つ口を過大視して、何とか早くなおしてくれないか、もっとよい医者はいないか、もう一度手術をしなおしてください。もっとよくしてください。といって、何べんも、切ったり、はったりしているうちに、だんだん上のくちびるがなくなって上顎が発達しなくなるのです。

この子、三つ口だけどかわいいんですよ、笑うし、えくぼもできるんですよ、といって、もし十歳まで親が待ってくれたら、十歳になると顔もしっかりするので、その時、一発きれいな手術をすると三つ口だったのがわからないくらいきれいになるのです。ですから、子どもは本当はそうしてもらいたいのではないですか。子どもに「いつ手術しますか」なんて聞いたら、赤ちゃんがもししゃべれるとすると、「ちょっと待ってください。おっぱい飲んでから、ゆっくり考えますから」なんていうんじゃないですか。それが生まれると、すぐ親の意見で、かわいそうだからすぐ手術をするということになる。今、おなかがすいてる方が、ずっとかわいそうなんです。過大視すると、たいていまずいことになるんです。どんな重症心身障害であろうと、精薄であろうと、この子には、こういうことがあると思って、その子なりに扱っていると、普通の子どもがやっているような状況を全部与えることが大切なことがわかります。その上で、この子には、三つ口という問題がある、それに対してはおいおい考えていこうということがいいですね。

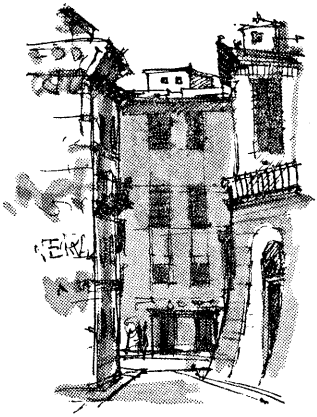
◆子どもが求めていること

発達異常があると、そこに目が奪われてそのためにその子のほかのことが、全部犠牲になってしまい、なんか福祉対策の対象のように考えられてしまうんです。

ハンディキャップというのは、みかけ上のことでは、はかれないものです。それをまわりの人や本人がどう思うかによって決まるのです。見たところすごくても、まわりの人や本人がそう思わなければ、ハンディキャップとしては存在しないのです。まわりの人がどれくらい過大視して、大騒ぎするか、また本人がそれをどれだけ苦にするかによって、問題の大きさは、決まってくるのです。

この子たちがいちばん求めているのは、どんな異常や変わったところがあっても、そういう個人差をもつ一人の子どもとして、その状態を全面的に受け入れて、障害の有無によって差別したりしないで、普通の子どもの場合と同じように人として認め、その子の成長に必要な保育の機会を用意し、人としてのその子を育てていこうという姿勢をもった保育者なんです。どうぞよく考えてみてください。障害があってもなくても、子どもとして必要なものは必要なんです。障害があるというだけの理由で、それさえ与えないどころか、かえってそれを剝脱してしまうようなことを、われわれはいままでしばしばしてきていた、ということではないでしょうか。

（現職研究会講義）



特殊幼児の保育

出席者　斉藤幸彦　横木マス子　清水光子　関治子　青木秀子　津守真子　本田和子
司会　中島栄一　渡辺祝子　水田順子　川島杜紀子　河井祥子　佐野恵子

本田　きょうは「特殊幼児の保育」というようなことで話合いの時をもたせていただきたいと考えております。特殊な幼児―特殊という言葉がいいかどうか、これもいろいろ問題があるかもしれませんけれども―とにかく、普通のお子さんなんだけれども、ある部分に特殊な傾向をもっている、たとえば他人との関係が非常につきにくい傾向をもっているとか、聞く力、あるいは見る力とか、そういうことが一般に欠けている。まあそういうような子どもたちに接しておいでの先生方から、お話をうけたまわりたいと思います。

この「幼児の教育」では、そういう子どもたちのことを、特に保育の問題をどう考えていくかを編集の一つの柱としておりまして、そういうところでご執筆いただいた先生方も幾人かお加わりいただいているわけです。

まず一応簡単に自己紹介と、今までどういうお子さんをおあずかりになった

か、特にどういうことをお話いただけるか、ちょっとお話願いましょうか。中島先生から順にお願いいたします。

中島　ぼくは横浜の東小学校の難聴教室におります。実は、難聴の幼児はなかなか普通幼稚園に入れていただけないので、幼稚園の先生方とどういうふうにしたらいいか、ということを勉強しにきたわけです。

斉藤　同じく斉藤です。横浜では昭和三十九年に言語障害児の教室を作りまして、そこで言語障害児一般を扱っていたのです。それで昭和四十二年に東小学校に新しい教室を作ったわけですが、施設の関係上聴覚障害児が主力をしめております。私たちの立場からすれば、「ガン」ではないんですが早期発見、早期治療が言語障害児にもいえることなんだと強く主張してきたんですが、市立の小学校に設置されているものですから主力は小学生で、余裕をみて幼児を扱ってきています。昨年度七名、今年度は二名、そんなところですので、むしろ普通幼稚園にお願いしたいのです。

結局、私たちの力、家庭の力、幼稚園の力、それから特殊な症例ではお医者さんの力と、この四者が一体に結びついた時に、その子にとって一番プラスなことができるんじゃないか。その重要な柱である幼児教育を、いかにしてうけさせるか、それを私たちの方からお願いしつづけてきたわけです。

青木　附属幼稚園の青木です。私は今まで担任としてこういう子どもをもったことはないんですけれども、ここの幼稚園の役割として、そういう子どもたちも含めていかなければいけないんじゃないか、またそうしたいという気持はあります。文字の上だけじゃないそういう保育の実際を伺いたいと思っています。

関　同じくここの関と申します。ここの幼稚園は一応選ばれた子どもということになっていますが、その中にもやはり特殊な—先生方から見ればまことにぜいたくなことかもしれませんが—子どももあり、まあそういう意味で特殊な幼児というものも考えさせていただきたいと思います。

河井　今までうちの幼稚園で保育をしておりまして、そこでそういう子どもに出会って、その楽しさを非常に強く感じました。

横浜の中島先生と反対に、うちでうけいれたお子さんたちを、さて小学校に出そうとすると、どこでもうけいれてくれない。十二月の終わりごろから三学期にかけては、そのことでとび回らなくちゃいけない、毎年それをくり返しているわけですね。ですから幼稚園と小学校はそういうところでもっと関係をつけて、保育の内容、小学校の教育の内容も考えなくちゃいけないところまでくるんじゃないか。

それから、ああいう子どもたちを見ていると、何をしなければならないかって

いうことが本当に教えられるような気がしたわけです。ですから、力がないならないで、余計にあの子どもたちをうけいれてやらないといけないんじゃないかと思いました。いろいろな幼稚園で一組に一人でもいいから、とってくれたらと、きょうはどうしてもそれをいいたいと思ってきました。

本田　河井先生は今年からここの幼稚園の方にいらしたんですが、今までは鎌倉のご自宅の幼稚園で、今お話しのような保育をつづけていらっしゃった方です。

佐野　津守研究室の佐野です。静岡大学で特殊教育を勉強してきましたが、現場の経験は全然ありません。きょうは記録係をさせていただき、私自身の勉強にしたいと思っています。

渡辺　私は去年一年自閉症の子どもをあずかりましたが、学問的にはそれほど自閉症について勉強していないうちに、実際の場にぶつかりまして、いろいろな障害はありましたが、どうやら普通の小学校の特殊学級にいれていただきました。でも、四月になってその小学校に見学にいきましたら、非常におそまつなんですね、内容が。特殊学級といいましても、難聴とか、その他症状によって、ぜいたくな話ですがクラスがいろいろできたら、どんなにめぐまれた教育ができるのではないかと思います。現在は言語障害のお子さんを扱っておりますのでよろしくお願いします。

横木　横浜のみこころ幼稚園の横木と申します。三年前に始めて、軽いちえおくれのお子さんと自閉的傾向のお子さんとをもちました。私考えますのに、担任の教師が一人でやっきになっても、どうにもならないような気持を、最近味わっております。一番大事なことは、幼稚園自身の姿勢だと思います。園長はじめ職員全部がその気持にならなければむずかしい、ということで苦しい気持も多少味わっているんですけれども、幼児教育っていうのは社会性ということを何よりも大事にしていきたい。そのためには、人間というのはいろんな意味で恵まれた人ばかりではないんだ、ということを小さいうちから身につけさせて、思いやりとかそういうものを遊びの中で教えていくために、どんどんうけいれたいと思うのです。けれども私立というのはいろいろな意味でなかなかむずかしいものがありまして、何か大きな力が働いてほしいと思っております。

津守　私は津守です。どうもこのごろ、幼稚園に入れてもらえない子どもがふえつつあるような気がして、気がかりになってしかたがありません。それから、実際に障害児を幼稚園全体がいっしょになってやっていかれるのか、ということに大変関心をもっております。

川島　津守先生とごいっしょに、愛育研究所でおもにちえ遅れのお子さんたちの保育を行なっております。

清水　音羽幼稚園の清水でございます。私がどうして障害児に関心をもち始めた

かと申しますと、私が小学校へあがるころに近所にオシのお子さんがおりまして、ある日突然物かげから出てきまして、私をこう、ぶつようなかっこうをいたしました。私は大変こわくて、弟の手をひっぱって逃げ帰ったのですが、そのお子さんの手がとてもすっぱいにおいがしました。その恐怖感が強烈だったので、障害児に関心をもつようになったのは、そんなところに遠い原因があるんじゃないかと思います。

大きくなってから思いましたところでは、幼い子どもたちにとって、こういうお子さんは異様にうけとられるというのはいけないんじゃないか、特別に扱うということは大変いけないことなんじゃないか、と考え始めたんでございます。

私の幼稚園も、知能テストらしきものをしてお子さんをいれているわけですが、きょうまで二人ばかりそういうお子さんをお入れしました。お入れすることが他のお子さんのためにプラスになるのではないか、という見通しのもとにお入れしたわけでございます。

今年、その内の一人が卒園いたしまして小学校にあがりました。脳性マヒで下半身がマヒしているので、苦労ののち特別な学校にお願いしたのですが、幼稚園の時より大変疲れがひどいということです。

それで、いろんなことを申しあげてなんですが、そのお子さんは軽度の身体障害なんです。軽度のお子さんほどうけいれてもらえないという、それを私知りまして、何か方法はないものかと、いろいろなことが感じられまして、この集まりに加えていただきました。

水田　私は、愛育研究所で家庭指導グループを担当しております、水田でございます。

本田　いま、うけたまわっておりまして、中島先生、斉藤先生の方から普通児の幼稚園へ入れてもらうのにはどうしたらいいかという問題、それから逆のお立場からは小学校へ入れる時に大変苦労されたということが出てまいりました。それで、どういうきっかけでこういう子どもたちが皆さんの園に入ってくるようになったのか、その辺のことをお願いいたします。

河井　津守先生のお話をお聞きした、それが一番最初だったと思うのですね。それから、四年前にたまたま自閉的傾向をもったお子さんと、未熟児で生まれて、こんなに頭が小さくて、三年生の年齢なのに、三歳児のクラスに入れても小さいようなお子さんが入ってきて、それが最初の出会いだったんですけれど。あとは愛育研究所の方からいろんなお子さんがまわってきたり……。うちでも専門の勉強をしておりませんので不安で、必ずどこかで管理していただくという約束で、愛研とか療育相談センターとか、そういうところとつながりをもってきているわけです。

それが最初で、まあこちらも味をしめ

ましてね。やっぱり普通児だけじゃつまらないし、何もしないのに他の子どもたちも協力してくれて、いい結果が出てくるし、その子どもたちも、もう本当に、何もしなくてもよくなっちゃうわけですね。（笑い）今年は、ちょっとはちきれちゃうくらいに多くなって、これじゃいけない、各園がそれぞれ近くのお子さんをうけいれてくれないと……と切実に思うんです。

渡辺 自閉症のお子さんの場合は愛育研究所の依頼でおあずかりしたんです。もう一人、うちの幼稚園はまだ開園三年目でございまして、入園時の選考も特にきびしい点もないので、全然口もきけない言語障害のお子さんが偶然応募してきたお子さんの中におりまして、さあ、このお子さんをどうしようか、とやはり問題になったわけです。それで、そういう方面にご相談しましたところ、「現在の教育はそういうお子さんほど、普通のお子さんといっしょに保育することに効果があるんだ」「ぜひ、そういうお子さんこそとってあげてください」ということで昨年そのお子さんをとりました。

で今年は二人入ったんです。一人は三歳児で女のお子さん、もう一人は男のお子さんで四歳なんですが、ちょっとちえ遅れというところで、どちらも人から聞いたとおっしゃって…。どちらも徒歩で通園できる範囲内ですので、ただ今幼稚園に来ております。

横木 私は、それこそたまたま、一年保育を担当させられまして、応募の半分ぐらいしか満たなかったわけです。二十四、五名ぐらいでしたか……。そこへ一人入ってきましたのがちえ遅れのお子さんだったんです。それからもう一人の自閉的なお子さんは二年保育の時にテストをおうけになって、一度落ちたんです。それでもなおうけにいらしたということでとりまして、ただその時に主事先生に、「これはあくまで担任が責任をもって保育しよう、という強い意志がなければ、お断わりした方がその子のためにもいいんじゃないか」とおっしゃられまして、この際勉強してみようと、「けっこうでございます」とおうけしたわけなんです。

それまでは、なんにも知識がなかったものですから、一学期間というものは、本当に他の子どもたちにはかわいそうな結果に終わったようなことでしたけれども、夏休みをきっかけにいろいろ勉強いたしまして、二学期には、普通児にも、いろんな意味で、二人のお子さんのいい影響があらわれてきまして、とてもありがたい、ほほえましい場面が、見られるようになりました。お母さま方にも多少の影響はあったような感じがありますし、子どもたちはやさしい思いやりのあるクラスになりまして、私もある意味で成長させていただきました。できましたら、こういう形か、あるいは特殊学級的な形か何らかの形で、またやってみたいと思うのですが、なかなか思うようには

いっていません。

本田　それぞれの幼稚園で、どういう形でそのお子さんをうけいれたかをうかがってみたわけなんですけれども、水田先生、今のご発言お聞きになりながら、お感じになったことはございませんか。

この間の、先生の「幼児の教育」の記事にも、ちょっとおふれになっていたように思われますけれども。

水田　私たちのところに来ている子どもで、遅れてるって、お母さんが気がついている場合には、幼稚園に入れる時に非常に躊躇してしまうってことが多いんですね。っていうのは、やっぱり試験があれば落とされてしまうだろう、っていうんで、私たちから見れば、もっと積極的に幼稚園に通ってもいいんじゃないか、と思うお子さんでも、まあ行かないで我慢してしまうっていう状況、そういう方が見られます。私は「幼児の教育」に幼稚園の試験制度っていうのはどういうものかなっていうことを、疑問として出したんですけれども、子どもを試験するっていうことは、ノーマルであるか、遅れているかっていうのを判定するっていうことですが、私は大変むずかしいことではないのか、できないことではないのかって思います。

今おっしゃってくださった幼稚園が、皆そういう意味で、大変よくうけいれて下さっているっていうことを、私は大変嬉しく思うんです。

本田　今うかがっておりまして、私自身感じましたのは、渡辺先生のところでも創立間もない幼稚園だったので、入園の選考を非常に簡単になさった、そういうために障害をもったお子さんが入って来る余地がおありになった。それから横木先生のところでも、一年保育の応募人数が少なかったために、たまたま入って来るというきっかけもできた、そのようなことをうかがっておりまして、水田先生もおっしゃいましたように、幼稚園の選考制度っていうものが一つの壁である、そういうものが何かの事情でゆるまったような園には入りやすい、というような状況で、そうでない場合にはやはりむずかしいのではないかな、と考えたわけでございます。ただ、さきほど清水先生が「入園テストをしているのだけれども、あえて二回ほど入れたことがある」という貴重なご発言をなさいましたのですが、「あえて」お入れになった、これは園長先生としての一つの何かお考えがございましたのでしょうか。

清水　たのまれたわけです。二、三年前に入ったお子さんは、少しびっこをひくのと同時にちえ遅れで、他の幼稚園を卒業して小学校へ入る段階だったのです。でも「小学校を一年遅らせた方がいい」って忠告をうけたので、同じ幼稚園に残るっていうのはかわいそうだからなんとかしてあげられないかってたのまれましたものですから、お入れしたわけです。もう一人は五歳児で、それまで特別な治

療施設のようなところに入っていましたが、「もう大分いいから普通のお子さんといっしょの生活をさせたい」っておっしゃったもんですから、そういうお子さんが一人いらっしゃることで、そのお子さんはもちろん、いっしょになったお子さん、それに私の幼稚園は小さい園ですから園のお子さんたち全体に、何かプラスになることがあれば、という冒険のような気持でございましたけれども、そんなことでお入れしたわけなんです。

本田　それでは、幼稚園がうけいれてくれなくて困る、というような問題をおもちでおみえになった中島先生、斉藤先生、ただ今の幼稚園側のご発言の中から出された問題点について、いかがでございましょうか。

斉藤　お話をうかがっててね、ここへ出席された先生方っていうのは、本当に理解があって、むしろ私たちが考えていることを実際の場に移しているという感じがするのですね。

私たちが普通学級へ通学させる時も同じなんですが、大体いわれるのは「そういうお子さんを今までもったことがない、今まで幼稚園へ入れたことがない」こういうことがさきですね。それから「もっとそのお子さんに適した教育機関がほかにあるんじゃないですか」というふうにいわれるんです。さっき、小学校はうけいれてくださらないっていう話が出たんですけれど、まあおそらく、この二つのどちらかをいわれて断わられた、という形になるんですが、幼稚園の場合でも、ほとんどそういうことをおっしゃるんですね。

それから、入園テストの問題なんですけれども、正規のテストでうけいれられたお子さんっていうのはありませんね。私たちが紹介する時には、大てい言語障害とか、聴覚の問題については私たちの方の教室でうけもちますからうけいれてほしい、とお願いするわけなんです。私たちがやる、といいましても週に二、三回の期間で見ておりますから、大部分は家庭か幼稚園ですごしているわけなんですね。ですから言語障害について、どんな有効なことをしてあげたとしても、幼稚園や家庭の協力が得られないと実際のところ、意味がないわけなんです。

それからもう一つは、私たち、小学校にいるもんですから、公立学校の場合には、今の教育組織に問題がある、と私たちは思っています。たとえば、普通学校に進学すれば普通教育はうけられるけれども、その子がもっている、それ以外の必要な教育はうけられない組織になっているのが現代ですから、ろう学校に入れば、ろう学校という教育はうけられるけれども、普通教育は全然うけられない。ところが、実際の子どもを見てますと、たしかに普通教育をうけられる可能性の部分もあるし、特殊な教育をうけなくちゃならない部分もある。今の教育組織では、どっちかに入らなくちゃならない、

と子どもたちはどっちかのかたよった教育しか与えられない。じゃなくて、その子が必要としていれば、その教育がうけられるような、そういう組織ができれば私たちも苦労することないし、担任の先生も苦労することない。

私の教育は、難聴の子どもが主力ですけれども、ほとんど普通学級に籍をおきまして、「言葉と聞え」というような面だけ、私たちがみる、というような組織をもっております。これがちえ遅れの子どもにしても、肢体不自由の子どもにしても、全部にそういう教育をうけさせるようになると明るいんじゃないか、という気がするのです。

中島　さっき、担任の意志というようなお話があったんですけれども、実はぼくがちょうど今あずかっている子どもは難聴で、大体七〇デシベルぐらいなんですね。そのぐらいですと普通幼稚園へ行って、あと難聴教室に週二、三回通って言葉の訓練なんかすると、割合にうまくやれるわけなんです。ところが六〇～七〇デシベルの子がろう学校へ行くとすると、ろう学校では、八〇デシベルすぎの子が多いわけですから、どうしても言葉の環境ってものがあまりよくなくて、周囲の独語とか、身振りなど覚えちゃうんですね。ところがたまたま七〇デシベルぐらいですと、幼稚園をろう学校へ通って、今度は普通小学校へ行くわけなんですね。すると、どうも言葉の状態が良くないんですね。どうも言葉の発達が、難聴教室に通っていて普通幼稚園に行っている子の方が一年にあがる時に全然違うわけなんですね。

それで、「ぜひ普通幼稚園に入れてください」とお願いした子が一人いたんですよね。そしていざ入る、という時になったら、今までやっていた先生が年長組をもつことになったんです。すると園長先生は「その人にはまかせられるけど、他の先生にはやれない」というんですね。「だからお断わりします」と。その子は年少組なんですね。担任の先生が、ある程度「私がやります」といってくれれば、園長先生は許可なすったんじゃないのかね。でも結局、園長先生としては担任に「私はだめです」といわれれば終わりですよね。この幼稚園はこんなぐあいでだめになりました。

前にやはり一人、これは言葉は割によくできた子ですけれど、その子が言語教室に通って幼稚園に行っていたことがあったんです。そこは担任の先生が理解があってうけいれてくれたんです。園長先生はもちろんですが、むしろ担任の理解の方が大事なんじゃないか、と考えます。

横木　両方の場合が考えられるんじゃないかしら。（笑い）

中島　まあそうですね。もう一つ、さっき河井先生がいわれた、どこかで、たとえば神奈川県療育相談センターなどで管理してもらえるといいというご発言がありましたね。それはどの程度の管理……

たとえば週に一回、そのセンターに通うのか、それとも月に一回ぐらいでいいのか、あるいはじっと見守っていればいいのか（笑い）そのへんのことについてどうでしょうか。

河井　一応症状を見ていただくということで、週に一回通っているんですけれども。そこの先生とも親しくして、向うからも来ていただく、私たちも子どもにいっしょについて行くこともあるんです。

それからクラスのことなのですけれど、うちではべつに四歳だから四歳のクラスに入れなくてもいい、とってくれる先生のところへ入れるんです。去年私は四歳児をもっていたんですけれども、そこに二歳の自閉的な傾向のお子さんがなるべく早い方がいいだろうということで……、いいですね、そういう関係は。兄弟の関係のようで本当によかったと思っています。あまりお客様ではいけないけれども、ある程度ゆうずうをつけて、幼稚園の運営に無理のない状態というものを考えていかないといけないんじゃないかと思います。

斉藤　実は入園テストでね、最近おもしろい問題が起きるのですよ。「幼稚園の入園テストに行ったら『お宅のお子さんは言語障害だ。どこか適当な所へ相談に行きなさい』といわれた」というのですね。入園テストを受けたためにそういわれちゃって、なるほどそういえばそうかなってなもんで、「〇〇ちゃん、もう一度いってごらんなさい、そうじゃないでしょう」ということになっちゃって、かけ込んでいらっしゃるお母さんが出てくるんですよね。最近こういう面では非常に無責任だなあと思うんですけれども、他に適した機関があるのでは、ということの裏返しになるんですよね。

障害を発見していただくのはけっこうなんですけれども発見してその後は「お母さん捜しなさい」ってわけで、いろいろたずねて来られるわけで、そしてまた巻き返しになって「イヤイヤ、それはいいんだけれど適した機関っていうのは、お宅の幼稚園なんだから……」と説明するわけなんですよね。

それから、受けもったことがないっていうのは、私も五年間普通教育をやったあと、五年ほど特殊学級をもちまして、そして言語障害へ入って、その中でも難聴を主とする今の教室に入ってきたものですから、特殊学級の場ばかり歩いてきたんです。それでも、言語障害へ入った時は、実は「言語障害は、どもりと何かな、失語症くらいかな」くらいの知識しかなくて、入ってから「ああなるほど、こういうものなのかな」と見直したわけなんですけれども、やはり私たちが、そういうお子さんを目にした時に考えるのは、今まで過ごした人生の中に、そういうお子さんがいたかな、そういう子どもの扱い方を教えてもらったかな、少なくとも、そういうことについて聞いたことがあるかな、っていうことなんですよ。

ところが言語障害があり始めたその当時、私たちは実際の生活の中で失語症っていうのは本などで読んだ記憶がある。それから、どもりっていうのは友だちの中にもいましたから、ああいう話し方は私たちにとっては非常におもしろかったんで、からかったり、真似した経験もあるし、あんまりいい友だちではなかったんですからパッと思いつくわけですね。それから大学では、私は実はろう専攻でしたので、ろう教育のことについては習ったけれど、それ以外の言語障害っていうのは習った記憶がないわけなんで、やはり考えてみるとこういうお子さんが急にふえたわけはないのですけど、私たちの生活の中でそういう友だちは見つけなかった。そういう友だちがいなかったから、私たちはどう扱ってよいかわからない、という心配がある。だから裏を返せば、こういう子どもたちを入れることが普通児にもプラスになるんだ、という考え方で私も教育を受けたらそんなに恐れることなかっただろうし、変な目で見ることもなかったんだし「ああ、あれはあの友だちと同じだ」っていうようなもので、素直に私たちも教師として受けいれられるという感じをもつんですがね。お母さんたちに特にいっているんです。「家庭でしょいこむな、社会にしょってもらえ」って。

渡辺　でも、お母さんたちはそれを隠すっていうのか、最近は障害児のことについて随分問題にされまして割合大きくクローズアップされてきましたけど、今でもやはり人より欠陥をもっていると恥ずかしい、なるべく外に出さないで、ということで随分遅れてしまったということがありますし、また私のクラスに一人言語障害のお子さんがおりまして、そのお母さんはわが子をそれほど重症と思っていなくて幼稚園の入園テストを受け、それがよかったんですけれど、最初の面接の時に「家の子は、ちょっと口が遅れているだけです」といったんですね。ところが集団生活に入ってみると、全然聞けませんし足はもつれるし、知能検査では二歳の知能位しかないのです。それでも親の方はわかっていなかったわけですね。自閉症のお子さんをあずかった時も、最初「どうして気づいたんですか」って聞きますと「保健所で三歳児検診の時に初めて保健所のお医者さんから『ちょっとこの子は言葉がおかしいんじゃないか』といわれ、それまではこの子はおとなしいと思っていただけで、それからあわてあちこち調べてお願いしたりした」っていうことなんですね。ですから、早く気づいて、河井先生のところのように二歳ぐらいから幼稚園に入れたら本当に随分よかった、三歳までの一番大事な時期に遅れを取り戻すこと、早く発見するっていうことはとても大切だと思います。

河井　その、普通児の中に入れる、ということなんですけど、この間ある先生が普通児の家に家庭訪問に行きましたら、お母様がおっしゃるのに「最初はこんな

幼稚園に入れてシマッタと思った。こんな幼稚園に入れて失敗した」って。「だけど何日かして幼稚園に行ってみたら、親ができないようなことを自分の子どもがそういう子どもたちに本当に親切にやっている。本当に幼稚園の教育っていうのは、こういうことなんだということを初めて知った。本当にこの幼稚園に入れてよかった」とおっしゃっているんだそうです。そこに普通児との教育のこともあると思うのです。私たちも、子どもも、お母さんたちも理解するっていうことですね。

渡辺　担任だけでなくて、園全体の先生方の理解が大切ですね。うちの幼稚園では一応クラスは決まっていますが、三歳の、今年入った言語障害のお子さんが、一日中あちこちの室にいたり、そして昨日なんかも笑ったんですけれども、年長の子がタイヤがずっとつなげてあるところを馬跳びをやっていた。その真中に三歳の言語障害のお子さんが入っちゃったわけなんです。年長はどんどん跳んで行きますね、ところが私がひょっとうしろを振返ったらずっと間があいてるんです。そしたら、その子が真中に入って一つ一つ跳んでいくのを、ずっと行列で待っているわけなんです。もちろんその子は私のクラスの子じゃないんですけれども、そういうことで園全体の先生が暖かくその子どもたちを見守ってあげるっていうところに、より以上の方法があると思うのですね。どこのクラスに行っても邪魔にしない、ということで幼稚園中駆け回っております。

本田　今、中島先生は担任の先生の理解の必要ということ、横木先生は園長の理解がないということを、そして今の渡辺先生からも園全体の協力というようなことが述べられまして、園全体で、障害をもったお子さんを受けいれることの重要性が出されたわけでございますが、河井先生のところは、お話をうかがっておりますと受け入れたくてしょうがない、という感じがするんですけれども(笑い)まわりの受け入れ体制はできているのでございますか。

河井　父が園長ですし、母がいばっておりますし、私がいばっておりますし、他の先生たちには何もいわさずにやっておりますし(笑い)。一言でいえば、先生を受け入れる時に、こういう子どもに理解のある先生を、ということで最初から決めていましたので、そういうことで勉強したくてしょうがない先生たちばかりでございますから。ああいう子どもたちを理解できる先生というのは、大体普通児に対しても大変理解があるわけなんですから、子どもはとっても幸せだと思うんです。

本田　いかがでございましょうか。今大変おもしろいお話が出ておりますが、ご質問なり、今後取り組むべき課題をお考えの先生方からのご意見なりございましたらどうぞ……。

中島　何にも知らないで入っちゃう場合、案外うまくいく場合があるんじゃないかと思うんです。僕が小学校のころなんですけど、時間中出て歩いて時計がすごく好きな子がいたんですよ。今考えてみると自閉症だったんじゃないかと思うんです。当時、時計が校長室にしかなくて、時々中に入って何時間でも時計を見ているらしいんですよね。それから、夏なんかは先生が授業やってると後から入って来てグルッとまわって先生の前を通って、また出て行くんです。学校中歩いているんですね。ところが先生方皆、おもしろいっていうんです。授業の邪魔にはならないし、ただ通るだけですから。それでなんとなく受け入れられて自由に教室だとか廊下なんか歩いているのを記憶しているけれど、これだって初めから自閉症とかなんとかいわれたら、ちょっと受け入れてくれなかったと思うんです。知らないから入ってきたというんです。

その後、その子が大きくなったらそのようなことがなくなったということで、ぼくの組じゃないからわからないんですが、いつの間にか回って来なくなったということで。だから同じようにレッテルを貼っちゃうとダメというようなことがあるんじゃないでしょうか。

本田　ただいまのお話、津守先生が大変お好きそうな話題だと思うんですが、いかがでしょうか。

津守　そうですね。その通りだと思うんです。あまり早期に発見しすぎると問題があるんです。発見することによって、その後の責任がもてるものはよいけれど、そうじゃない場合、発見することがただレッテルを貼って分類することだけに終わってしまいますからね。

斉藤　やっぱり幼稚園は、たいていどこでも入園テストがあるっていうんですが、入園テストは選抜のためのものですか。

横木　まあそうですね。ただ幼稚園としては辛いことは辛いんです。問題のお子さんが見えた時に何を規準にして見るか……。それから古い幼稚園になりますと、きょうだい、いとこ、はとこ、いろいろありましてね。本当にガラガラポンとクジでやるのか……何か、それだけでもちょっと決まりのあるものを、というので……。

斉藤　私のところにいた子どもで、うまく幼稚園へ入ったんですけれども、私の方からいろいろ幼稚園へ連絡するのを親の方で誤解されるんですよ。「どういうわけか」って聞いたら「あまり手がかかることがわかると出されちゃう。園に『うちの子はこういう状態なんですよ』というと『いつでもお引き取りください』といわれそうで、入れてもらえただけ幸せだから寝た子を起こさないでください」っていうことなんですね。幼稚園に何しにいらっしゃられるのか(笑い)。私たちのつもりとしては、担任の先生にお子さんの扱い方をよりスムースにしてい

ただければ、先生の方はむしろ楽ではないかな、とお伝えしたいわけですよ。

私たちよく小児科の医者に責められるんですよ。たとえば脳波の異常がでると小学校は受け入れてくれない。すると私たちみたいに特殊教育をしている者に「先生っていうのは一体どういうわけなんだ。脳波の異常があるからこのお子さんはとても無理だといわれるけれど、よく見ていたら脳波をやったら異常が出るんじゃないかっていう子はちゃんと入ってるのに、脳波の異常ってことだけで断わられるのはどういうわけなんだ」と。そういう意味では、名前がつくと非常に重たく思われ、そうでないと案外受け入れられる。ということに出くわしますね。実は、私たち自身教職にいることで責められてることがよくあるんですよ。

中島　そういう時には、僕はちょっと嘘をつく時があるんですよ(笑い)。普通学級の先生は補聴器っていうのはよく知らないですよね。だから「難聴なんだけれども補聴器つけてれば何でもよく聞えるから…」というと本当にそう思っちゃうんです。そうして少したってから「こういうことはオレはどうも…」と出て来るんですね。それでも入ってすこしたつと子どもとのラポートがつくでしょ。そうすると「ダメッ」という先生はあまりいないですよね。よほど気が合わないかぎり、たいていはそのままうまくいっちゃうですよね。

初めから大変なんだという印象を与えちゃうと本当に大変になって、たとえば入学試験の時、健康診断が終わってから子どもを教室の一番前に座らせて、五、六人の先生がかわりばんこに教壇のところでお話をして「聞こえたか？　今何いったの」といわしたというような話を聞いているんですよね。それでよくいえなかったそうです。皆さん経験もあるし、多少知識もあるといっていいんですよね、だから現状ではごまかすことくらいしないと小学校でもすんなり受けいれてくれるところがほとんどないといってもいいんじゃないですか。そういう点で、われわれは小学校の先生に対する啓蒙なんかが必要だと思うのですが、なかなかそこまでいかないです。

斉藤　私たちは「普通のお子さんたちといっしょに生活する場、遊びの場を与えてくださることが、お子さんにとっては最大の教育になっているのだから、担任される先生がこの子のためにどういうことをしてやろうかなど、お考えにならなくってもいいんだ」というんですよね。「おいてくださるだけで一番の教育になるし、家庭にも近隣にもない、その子の教育の場になるんだから、とにかくその場を与えてください」とお願いしているのです。とにかく言葉が不自由ですから、やはり何かの手本がいるわけなんです。言葉がまずいからこそ、よい言葉を十分に聞かせられる、刺激を与えられる、ということだけ随分その子にプラスになる

わけなんです。「見守ってくださっているだけでいいんですから、なんとか入れてください」とお願いするんですがね。先生方非常にまじめでいらっしゃるので、お子さんにプラスになることをしてやろうと考えられるのですが、それが必ずしも子どもにとってプラスになるとはかぎりませんよね。

横木　最初二人受けもちまして、一学期が、今おっしゃった状態だったんです。でも二学期になりまして子どもたちの様子を見ていて、障害のある子をもった担任の役割は、その子に働きかけるのではなくて周囲への働きかけなのではないか、と思いました。

斉藤　さっき中島先生もいいましたように、同じ聴力の子どもでも、ろう学校の幼稚部に入れた子と、普通の幼稚園に入れてある程度私たちの方で見ている子どもと、まるっきり質が違うのですね。ろう学校の幼稚部にいるとろうの子の真似をしてしまって、聞こえることがマイナスに働いちゃうんですよ。ですから極端にいって「ろう学校は逃げないから、いつでも待ってるから普通のお子さんたちといっしょに生活させてみろ、それでどうしてもハンディがひどすぎてお子さんにマイナス面ばかりが強いならば、ろう学校に変えてみろ」と考えるのです。初めからろう学校に入れることは、お子さんにとってよくないですね、やはり周囲の環境は非常に強いですよね。

河井　うちの場合ですと、去年、普通幼稚園から普通小学校へ入った自閉的傾向をもつお子さんがあって、その子は一年ゆうよしたわけですが、なにせピアノがじょうずで、何だって弾いちゃう大変な特技の持主なんですけれど、そのお子さんを小学校に上げる時に、特殊学級ということ考えたのですが、環境って大切ですから、普通学級に入れてみましょう、ということでいろいろ働きかけ、寄留にして、うちの幼稚園の近くへ入れたわけですね。「いつでも、幼稚園へ戻って来ていいから」ということで斉藤先生がおっしゃったような形で小学校へ入りました。ここ何日か、少しいやがったらしいんですが、昨日「きょうは帰りに幼稚園へ来て、とてもごきげんだった」ということで安心しております。

本田　ただいま、先生方から普通幼稚園での受け入れ体制のことが話され、障害をもった子どもも、普通の子どもと何ら変わるところはないんだ、ということが出されましたが、ちえ遅れの子どもの保育にたずさわっておられる水田先生、川島先生いかがでございましょうか。

水田　お母さんたちが私たちのところへ来て一番感ぜさせるのは「こういう子どもたちは、どういうことをしたらよくなりますか、どういうオモチャがありますか、どういう遊ばせ方がありますか」とかいわれるのですね。そんなものは絶対ないですよ。「あなたのお子さんは普通と同じです。普通に扱ってればいいんです。他の子どもとちっとも変わりませ

ん。その子どもがやりたいことを十分にやらせてあげれば子どもが自分から伸びていくんです」っていうんですね。

私たちも実際に保育をしていて、何かをやったのだ、ということはとても思えないですね。私は、たまたま遅れた子どものグループをやっていますけれど、普通の幼稚園と同じことをやっていると思うのです。普通の幼稚園で遅れた子どもを受け入れるのを躊躇するのは、そういう子どもをたまたま知らないだけじゃないかと思うのです。受け入れて、つきあって見れば少しも違わないことを皆さんわかってくださると思うんですね。だから、どんな子どもであっても、まわりを整えておとなが見ていてあげれば、子ども自身がそれなりに伸びていくし、それが一番いいことじゃないかな、と感じています。

川島　私も子どもを扱っておりまして特別な子を扱っていると意識したことがありません。でもいらっしゃるお母様に対して「全く普通の子と同じだから」といえなくなるんです。というのは、お母様たちは社会の人々の見方や価格基準をいつも気にしていらして「どうしたら良くなるでしょうか」と聞かれるんです。子どもさんに何をしてげあればよいか本当はわかっていらっしゃるのに「もっと普通の子に近づくための何かを」と考えてしまうんですね。それで、障害をもった子も含めた幼児教育が、もっとなされていれば、親の苦痛は半減するわけなんですね。今の幼児教育は、本質的なものからあまりにも離れていることに気づかされております。

横木　個人の気持とは別に、幼稚園側の苦しさをちょっとお話してみたいと思います。お茶大の附属幼稚園のように本当に自由保育をしていらっしゃいますとやりやすいんです。でも、ほとんどの幼稚園が一斉保育で、私立で、場所が非常に狭くて、限られた所で、限られた方法でやっているわけなんですね。私のクラスでは年少組三十六人で、それを一人でやっているわけなんです。そこへ受け入れるとなると本当に大変なんです。ですから、他の子どもたちがおちついたころ受けいれてあげるとか、あるいは、レッテルを貼るという意味で望ましいことではないかもしれませんが、五、六人の障害のあるお子さんを一グループにして応接室のような所で、慣れた先生が、その子たちに合った保育をする、そして遊び時間を他の子たちといっしょにするとか、ある時は普通児の一斉保育の中に入れる場をつくるとか、いろいろ考えられますけれども、現実には一斉保育の中では苦しいことをわかっていただきたいと思います。

本田　ありがとうございました。今、大変現実的なお話を伺うことができまして非常に多くの考えなければならない問題が提起されたと思います。たしかに障害をもった、忘れられている子どもたちを普通の子どもとして受け入れていくこと

は両方の子どもにとって大切なことであります。またそれを実現させるためには多くの問題が残されております。このへんで、津守先生、まとめのようなお話をしていただいておしまいにしたいと思います。

津守 今お話をうかがっておりまして考えたことですけれども、現状ですと「普通の幼稚園で受けいれるよりも、もっと適した教育機関で受け入れたらいいのではないか」ということが、すぐ返って来ることがわれわれが一番経験していることなんですけれども。そのことを考えますと、今の幼稚園がもっと組の人数が少なくなったならば、それだけでも今の何倍かの子どもが受けいれられるようになるんじゃないかと思うんですね。人数が少なければその遅れた子にとっていいっていうだけじゃなくて、全部の子どもにとっていいわけになるんで、そうすれば問題は随分解決することは目に見えているということを私はいつも考えるわけです。

それから、もう一つは普通の子どもでも、うんと遊べるような幼稚園が要望されているんです。そういう幼稚園になっていけばどんな子どもでも入れるわけなんですが、このことが今、本田先生にいわれた時に、問題だな、と思ったんです。どの子どもも、こういう時代の中でもっともっとうんと遊べるような幼稚園にしていくにはどうしたらよいか、というような話題に触れてくるような気がするわけです。結局、専門化してきて、それぞれの専門で受けもてばよいという面もありますし、そういう専門サービス機関が発達することも必要だ。それからもう一方、どの子どもも教育を受けるということで考えると、それぞれの子どもに適した教育であって教育機関に適した子どもを作るのじゃない。それぞれの子どもに適した教育の体制をつくりあげて、どの子どももその子に合った教育を受けるように、ということが根本にきそうだと思います。

本田 教育機関に適した子どもじゃなくて、それぞれの子どもに適した教育の体制をつくりあげていくこと、このことをきょうの結論のようなものにさせていただきまして、この座談会を終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

手先の動きと子どもの感情 ⑬

清水エミ子

子どもたちの指先、手先をじっとみつめなおしてみて一ヵ月過ぎた。今また新たにひとつのことがらに気づかされた。

それは、子どもは、自分のからだの一部分である指先、手先の動きに気づくことが非常に少ない(だから無意識に心を表わすといえるのだが)ことと、自分の指先、手先の動きに自分が驚き、喜び、見とれるなどいろいろの心が動き、それを自分で気づいた次の瞬間、自分の手を自分で動かそうとする(目的をもって、目的に向かって手先、指先を動かしている)ことに気づいた。

自分で気づいて意識的に動かそうとする時、スムースに指先が動く場合と、どうしてよいかいきづまってしまい、苦しい表われをする場合とがあるなど、意識的に動かす指先にもいろいろの表われがあることを知らされた。

こんなことをおぼろげながら発見して、具体的な活動の中で、具体的によみとり、手先、指先の表われを見れば見るほど、心とのつながりの強さを知らされた。

進んでした活動の途中でいきづまった指

遊びや活動を、進んでしようとして参加していったが、途中でいきづまりをつたえている指先、手先。

例①

積木遊びを進んで始めたいくこの指先がいきづまりをつたえてきた時

登園したいくこは、コクン、とひとりでうなずいて、ホールの、中型箱積木の戸だなに行き、上から順番に積木を取り出し始めた。

こんな時の手先指先は、十本の指に力が入り、体の前に進んで持ち出し、積木をわしづ

かみにして床におろしていた。十個位を無雑作に取り出してから、目的に向かって積み始めた。（この時まで友だちはひとりもなく、いくこひとりで積木をいじっていた）

いくこ「おしろつくろうかな」

こんなことをいいながら、平面的なものを積み始めた。

いくこ「おしろできたら、あたしがおひめさまになるんだ。ここ、まどがいいかな」

といって、積木の大小を使って窓をあけた。

この時の手先の動きは、自信にみちて、自然の表われであった。（手の平も指も全部を使って、手首に力を入れて動かしていた）窓から顔を出して「ここまどだよ」といくこが、だれにいうともなく言葉にしていた時、かずよが近づいてきた。

かずよ「なにつくってるの」

いくこ「おしろだよ。ここまどなの、おひめさまがみるところ」

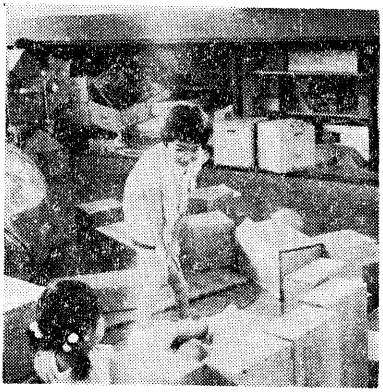
かずよ「いれて、いっしょにやっていい？」

いくこ「いいよ。ずっと大きいの作ろうか。ここみんなおしろならいいね」

かずよ「そんなに積木ないもの」

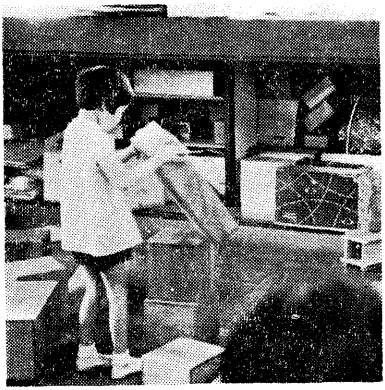
と話しながら、どんどん積木で、お城を作っていった。

かずよの指先も、いくこの指先も、自然の表われで積木をいじり、積木をつかんで積み重ねていたが（手の平全体を使って）、いくこは、形ができかかると、積み重ねた積木を四本の指先を使っ



写 真 (1)

写 真 (2)



写 真 (3)

て整えることをし始めていた。（写真(1)(2)(3)）

この時の指先、手先の表われは、緊張して力が入り、慎重そのものだった（第二関節より先に特に力がはいっていた）。顔やからだは、かずよとじょうだんをいったり、からだをくねくねしてふざけたりしているのだが、指先だけは真剣なのだ。（ピンとはり、そろえた指先の第二関節で積木をたたいていた）

こんな表われが見られたすぐあと、

かずよ「おしろの上は三角でかざるんだよ」

いくこ「そうだね、おくじょうみたいにしよう」

こんな話し合いがすんで、三角の積木がならべられた。この時、いくことかずよの構想にくいちがいが生まれてきた。いくこの指先はピクピクと動き、自分のももにこすりつけた。

いくこ「こうやっちゃだめよ。こっちむき」

かずよ「でもこのほうが大きくなるよ」

いくこ「やだな。こっちむきにするの」

といいながら、前より強くももにこすりつけ、次に指先を手の平の方に、ピクピク、ピクピクと動かしつづけた。

この表われを私はしばらくだまって見つめていたが、いくこの顔はあまり変化は見られず自然で、かずよが勝手にお城を積んでいるのを見つめているだけのように見えたのだが、指先は動きつづけ、そしてものところのズボンの布をつまんでみたり、胸の前で、くちゃくちゃと動かし、おちつかない心の表われを見せていた。

いつも、おしゃべりで気が強い性格であるいくこが、言葉でこうぎする前に、指先が、手先が、とまどいと、いきづまりをつたえてきていることがわかった。（言葉より、顔の表われより、まず指先が困り、いきづまりをつたえてきているのだ）

私は、いくこに声をかけてみた。

保「いくこちゃん、かずよちゃんがやるのとちがうやりかたがしたいんでしょ」

いくこ「うん、あれじゃだめなの。へんなかっこだから」

保「そう、そんなら、いくこちゃん、べつのところにもうひとつ、となりの国のおしろをつくれば？　そしてかずよちゃんの国にたずねていったりすることにしてみたらどうかな」

いくこ「それでも、そんなに積木がないからだめなの」

といいながらも、からだの横で手先を、にぎったり開いたりして、不満を表わしていた。が、顔やからだ全体からは、ただだめというだけで、それほど強い不満はよみとれなかったのだ。

しかし指先は、〝なぜ先生はわからないのか〟とおこっている表われだった。

しまいに、右手の人差し指を親指ではじいて、いらいらをつたえてきた。

保「そうね、たりないわね。そんなら、こっちがわをかずよちゃん、こっちがわをいくこちゃんてきめてやれば……。できた時どっちがいいかきめればいいじゃない」

とおそるおそる声をかけてみながら、いくこの指先を見つめてみたが、私の言葉の終わらないうちに、いくこの指先はからだの横にダラリとさがり、緊張はほどけていった。

次に、いくこの右手は、鼻をこすったり、ほっぺたをたたいたりして、心の不安、とまどいがじょじょに解決していったことをつたえてくれた。

いくこ「ねえ、かずよちゃん、男の子もいれて王様ごっこしようね」

かずよ「うん、でも男の子いれるとせんそうごっこのきちにしちゃうかもしれないよ」

いくこ「いいよ。こわれたら、またつくれば」

このように、いきづまりを、まわりのおとなや友だちが理解し、ときほぐすことによって（ほんのひとことの言葉かけでもよい）前進した遊びに発展していくことを、いくこの積木あそびと指先の表われを見て知らされた。

指先を見つめていると、不安やとまどいはいっぺんに解けたり、じょじょに解けたりすることがはっきりよみとれる。このよみとりの大切さを知らされた。

例②

アリを木の根もとにかえしてやろうと、手の平で土をかけてあげていたかひで

園庭の木の根もとのアリの巣を見つけ、しばらくアリの出入りを見つめていた。

この時のたかひでの指先は、指の一番先端を親指先端につけて、軽くまるめるような感じにして、アリに話しかけたり指示をしたりしていた。

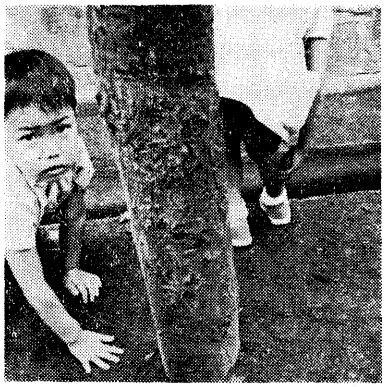
たかひで「ねえ、アリ、そっちへいくと、ゴジラがいるからよせよ」

といいながら、指先をピクンと動かしてアリを巣に入れこもうとした。しかしアリは、外へ外へと歩き出すので、土で巣のまわりにかこいを作り出した。

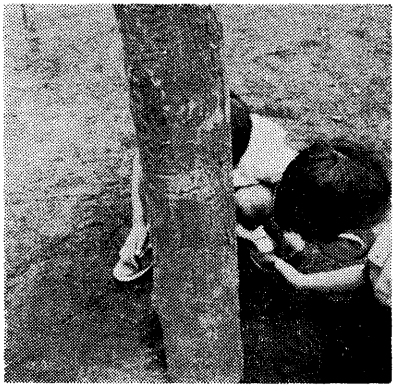
このかこいを作りはじめる時、手の平の小指の外がわのよこはらを土の上に、二、三回とんとんとたたいてみて（ここまでは無意識の表われのようだったが）、その手先の動かしかたを自分で見つめて、にこっとして、土のついた小指の横はらをながめ（無意識を気づいて意識した）、土のついた横はらを指を動かし土の落ちていくようすをじっと見つめてから、意識的に、もう一度、小指の横はらで土をとんとんとたたいてから、土を左右の小指の横はらでよせ集めて、アリがはい上がらないように土手を作っ

写真(4)

写真(6)



写真(5)



写真(7)

た。

土手をつんでは、土によごれた指の横はらをながめていたが、この時の、小指全体、手の平全体の表われは、力が入っていてピンとしているが、緊張と満足の表われとして、伝えていた。

近くで遊んでいたしんいちが、木の根もとにしゃがみこみ、（写真(4)(5)(6)(7)）

しんいち「あっ、ありの巣だな」というと同時に、右手の平を胸の前まで持ってきてちょっと止め、アリの行く手を確かめてから、アリの上をピシャンとたたいてしまった。

これを見ていたたかひでの指先は、右も左も、一しゅん、キュッとにぎりしめられ、次に、小指、薬指を神経質に小きざみに動ごかしてから、アッ、というまに、しんいちの頭をポカンとたたいてしまった。

この時も、からだや顔だけを見ていたのでは、ポカンとたたいてしまうほどにこうふんしているとは見えなかったのだ。たたいたのを見て私も、アッこんなにこうふんしておこ

っていた指を見ていたのに、指のたかまりをよみとったのに、おそかったと気づき、私はたかひでに、

保「いっしょにアリのうちをつくれば、アリは広いお庭がほしいから出ていこうとするんじゃない」

と声をかけてから、これだけでは安定しそうもないと思い、

保「先生もいれてよ。広いお庭作らせて」

たかひで「いいよ。でもアリってのりこえちゃうんだよ」

保「のりこえられないほど高くしない」

これを聞いていたたかひでの指先は、自分の胸の近くの上衣を小指の横はらでこすりつづけていた。その表われは「しまった。思いがけずしんいちをたたいたんだよ」と、きょうしゅくとどうしてよいのかとまどいを表わしているようだった。そこで私がからだを動かして、

保「たかひでくん、ここたのむわ」

と活動の場をあたえてみた。

たかひで「うん」「アッ、ほらね、もうのりこえてくでしょ」

と両手の手の平を合わせ、指先を、右に、左に、ゆっくりゆらりゆらりとゆらして見ていた。

しんいち「そんなら、はい上がらないように下をほろうぜ」

たかひで「そうだな」といって手の平をあごにあて、てれくさいのが終わった喜びを表わしていた。が、次の瞬間また、指がとまどって、あごの下で、指をにぎったり広げたりしているのを私はよみとった。

保「どうしたの、たかひでくん」と声をかけると、ますますあごの下の指先に力が入り、ぎゅっとにぎりしめ、どうしてよいかわからないとうったえてきたので、私はたかひでの視線をおってみた。すると、しんいちが、アリの巣ごとその土をほりおこしてしまい、アリがびっくりして右往左往しているのが見えた。

保「しんちゃん、アリの巣までほったらうちがこわれるわよ」

といってみた。

しんいち「でもここほらないと上がってくるんだよ」

たかひで「だめ、かわいそう、なきそうにあばれてるじゃないか」

この時のたかひでの指先は、もう土の上にのび、左の片手は土をにぎりしめ、片手はアリを指の先にはい上がらせ、土をにぎった左の手の平をおさらのように、おちてもだいじょうぶのようにうけていた。

このようすをみていて私は、

・自分の指の動きを意識したり、心のたかぶりを解消したりした時の表われは、瞬間的に動きがかわり、らくになったり、はげしく動いたり、力が入ったり、力をぬいたりすることの変化のはげしさ、早さを、いまさらのように知らされた。

例③

輪ゴムを長くつなげて小鳥をつるそうと、輪ゴムを二つ、両手でいちどにつかみ出したゆみこ

写真 (8)

ゆみこは二本の輪ゴムをいっしょに

○人差し指と親指でひっぱってみた。

○二本を、ひもを結ぶように、からめて結ぼうとした。

○二回ほどくりかえしたが、スルリスルリとほどけてしまうので、指にだんだん力が入り、

○特に小指と薬指に力が入り、何とかスベリとけないように止めようと力を入れたがだめだった。

○ゆみこは右手の人差し指と親指で輪ゴムむをつまみ、のこりの三本をピンと力を入れてのばし、じっと見つめてとまどいを伝えてきた。

この時輪ゴムをつまんでいる人差し指と親指は、輪ゴムの細いゴムを、人差し指のはらの上をころころころがして、どうしてよいかわからない、という表われを見せていた。

顔は、担任の顔を見上げているだけのように見え、指先ほどとまどいや不安はよみとれなかった。そのため担任もゆみこの困っていることに気づかず、他の子

写真 (9)

写真 (10)

写真(11

どもの指導をつづけていた。そこで私は、ゆみこに、

保「ゆみこちゃん、〝後藤先生、ちょっとうまくいかないのよ〟ってそうだんしてごらんなさい。きっと、どこかちょっとちがっているのかもしれないわよ」と声をかけてみた。

ゆみこ「うん、ゴムって、ほら、つるつるでしょ。だから、とまらなくて、つながらないの」と私の顔を見つめてつぶやき、右手の親指と人差し指の間でもういちど、意識的に輪ゴムをころがして見せた。そして、

ゆみこ「ごとうせんせい、つながらないの」と担任のうしろ姿に声をかけていた。

そこで担任が「一本の輪に一本を、こぐしてみてごらんなさい」と指示すると、

ゆみこ「ゆわくんじゃなくてこぐすのか」というと同時に、手の平全体の力がほぐれ、輪ゴムを軽くつかみ、左手の指をまるくして輪ゴムをひろげ、右手の輪ゴムを通していた。

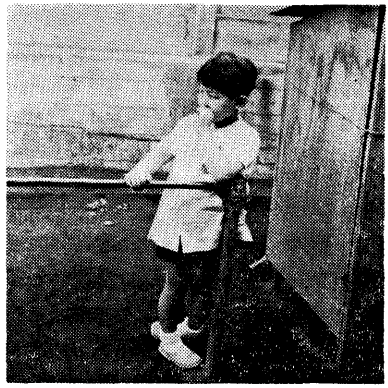
通し終わった一しゅんは緊張し、手の先全体（左も右も）に力が入っていた。が、顔やからだは全くらくらくとしており、片足をイスの足にからませていたりしているので、指先を見なければ、できたぞ、という緊張と、やれやれという安どの表われはよみとれなかったと思う。（写真(8)(9)(10)(11)）

こんなように子どもたちの活動中の指先をみつめていると、自分で進んで、活動や遊びにとび込んでいく子どもたちも、必ず何かのつまずき、とまどい、いきづまりを味わい、感じている。それを自分自身で、または友だちの力や言葉かけによって解決したり、次へ転換させていったりしていることがわかった。

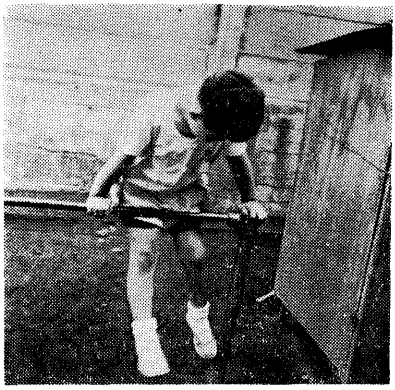
このように、自分、または遊具、友だちのはたらきかけで解決するとまどいや、つまずき、不安なら心配はいらない。かえって交わりが生まれたり、自分に自信をもつことができたりするのに役立つのだが、ここまでで解決しないときは、保育者のはたらきかけ、言葉かけ、指導、助言がなくては次へは進展していかれないのだ。

ここの三例を見ても、ほんのひと言の言葉かけが心をやわらげ、指先をらくにしている。

こんな表われを見るにつけても、適切な助言、言葉かけの大切さを強く感じるとともに、保育者の正しい言葉かけの大切さ——



写真(12)



写真(13)

多く語りかけすぎては失敗してしまうこと、子どもの心の要求に適した言葉のえらびとりのむずかしさに、立往生しそうになることを、どうしてよいかわからなかった。

○低鉄棒での指先のとまどい。（写真(12)(13)）

○当番をいきごんで始めたが、自分の心づもりとちがってしまい、大きくとまどいと不安を感じている子どもたち。

私たち保育者のまわりには、子どもたちのとまどい、不安、助けをもとめている指先が、時計の秒針が時をきざむのと同じだけ、表われているのだと、この一ヵ月、いやというほど見せられ、思い知らされたのだ。

言葉かけだけでの助けでなく、環境としての助け、はたらきかけも加えて、指導、助言してみた時の指先の表われも、見つめてみなくてはと考える。

（大田区立蒲田幼稚園）

訂正

八月号「保育者養成の問題」中、39ページ上段最後の行「故ソーラ・ジルベス」は、「故ローラ・ジルベス」のあやまりでした。

著者および読者におわび申し上げます。

子どもと動物のふれあい

遠藤悟朗

幼児教育の世界では、動物を教材として取りあげている場合が多い。それのみならず子どもの絵本などでは、動物が現われない場合の方が少ないのではないだろうか。そのような動物の中には、人の物語を動物の主人公に肩代りさせただけのこともある。いずれにせよ子どもたちにとって、動物はきわめて身近な存在といえよう。

しかし、生きている本物の動物に接する機会が乏しくなるのと反比例して、このような活動で我慢しなければならないことはまことに残念なことのように思われる。

動物と同じ地上に立って、子どもなりに、そして時宜を得た活動、場合によっては子どもにとってつごうの悪い状態に立つかもしれない。しかしそれにうち勝ってゆく、人間としてもっとも基本的な、そして素朴な経験は、動物を除いては他に得られないといっても過言ではなかろう。思うようにならないからといって、中には動物を好まない子どもも現われよう。瞬間的な情動によって支配される傾向にあるわれわれにとって、科学的に物事を処理する、また処理するその過程の中で相手を知る努力がなされなければならない結果にもなりかねない。このような前向きの姿勢で物事にぶつかってゆくことは、子どもたちにとって欠かせない内容であって、実物による直接経験の意義の、大半を占めることがらであるといえよう。

子どもたちが直接動物と対面した場合、見るだけではすませられない場合が多い。動物を追いかけたり、さわったり、つかまえてみたくなるのは当然で、その時どきに、幼児なりの経験を積み重ねているのである。何かをしでかした時の成就感を得るためか、すること自体を満喫しているのか、いろいろな形で行動するのを見かける。

しかし動物に直面した子どもが直ちにそのような行動をするわけではなく、一時はそれこそまばたきもしないでじっと見る状態から始まるようにうかがわれる。柵・檻があっても一メートル以上も離れたところでじっと見つめ、次第にいろいろな活動に移る。

子どもと動物の境界を設けない、いわゆる放しがいの場で接触をもたせると、子どもの状態はより顕著にうかがうことが可能となる。多くの子どもたちは、その場所に入る前にそれなりに動物を調べているのではないかとも考えられる。無鉄砲に行動する者もいないではないが、年齢的あるいは過去の経験、子どものもっている知識（先入感の場合もあろう）などによって左右されるものではあるまいか。

その子どもの状態にふさわしく、子どもと動物の橋渡しをしないと、とくに事実にそぐわない誤まった先入感などによって行動した子どもは、子ども自身予期しなかった動物の行動に出られてしまい、驚きのあまりふり出しにもどらざるを得ないようなことにもなりかねない。従来ならば放置しておき、七転び八起き式に子どもを突っぱねておいてもことがたりたかもしれない。動物に直接接する機会が乏しく、さらに情報過多の現今では、それなりの橋渡しがなければかえって悪い結果をもたらすものといえよう。

さきに記したように、自分から動物に働きかけられる子どもであるならば、解決の方法はそれほどむずかしいとは思われない。

一方働きかけようとしないばかりか、柵ごし檻ごしであっても動物舎の前を通り過ごす子どももいる。同じ地上で、直接動物にまみえる場合だと恐れをいだく子どももいる。過去、動物から望ましくない経験を得た者や、アレルギー体質（一〇〇万人に一人ぐらいの割）など体質的に問題のある子どもは別として、何でもないはずの者にもかなりいる。

盲児が初めて動物に接する際の不安を現わす言葉に、「これかみつかない……」というのをしばしば聞く。犬による事故の多い昨今のことなのでやむをえないかもしれないが、正常な幼児からでもこのような言葉をよく聞く。ヤギなどの話をする場合、上顎の切歯がないので「ヤギはかみつきたくてもかめない」と説明している。聞いて理解はするものの、からだで理解するのにはかなりの時間を必要とする。子どもにしてみれば不安にまさる喜びに

置き変えなければならないからであるといえる。

しかし動物は、幼児の眼を輝かさせるにたる「驚き」に満ちているのでありがたい。一時間ほどの間に、初めとはがらっと違った晴々とした子どもの姿を、私は毎日のように見せてもらっている。

ところが、何を見ても一向に表情を変えない子どももたまにはある。心の中には反応が起こっていても顔に表わさないのかもしれない。中には全く心が動かないような子どももいるようである。感受性が最も強いはずの幼児期をこのように過ごして成育してゆくのであるとするならばそら恐ろしいかぎりである。

極端に動物を忌避したり、あるいは望ましくない結果を経験したことによって、普通の幼児のように赤裸々な形で動物にふれあえぬ子どもは、時間をかければ普通児と同じ、否、場合によってはそれ以上にすることもできよう。病気や体質の問題は処置可能の範囲で治癒させることもできよう。好ましくない原因のもとは、子どもをとりまくおとなが作っている場合もあるようだ。原因除去についてはおとなたち自身が反省しなければならぬ点も多い。

動物は一定のリズムをもって、与えられた環境の中で生活している。それをじっと見守っていると、断片的かもしれないが特性らしいものを折にふれ発見させられるものである。

子どもたちが喜ぶ動物ショウは、元来そのような特性を巧みにとらえ、助長されたものである。人間ならばこうするはずのことを、チンパンジーはチンパンジーなりの運動能力を用いてこなしてくれる。人とは異なる意外性も手伝って、おとなも心から笑みをたたえて見入ることのできる場合が多い。

サルを立ち歩きさせる場合、好む食べ物や、大切にする子ネコなどを持たせることから始めたことがある。教える側が意図する姿勢、動作などを行なわせるキッカケを先ずとらせるための方法の一つといえよう。そして次第にならして、上手に、そして人の命令で行なえるように変えてゆくわけである。キッカケ作りも、状況如何では、人が手本を示す場合もあろう。しかし、綱渡りや一輪車に乗れる人はそうざらにいるものではない。動物ショウの多くは、習性をより高度に、そして人に喜ばれる扱いに変形したものに過ぎないといえよう。要はその動物が何ができるか、それを見いだすことから始まる。

ショウに該当するかどうか疑問ではあるが、「直径五十センチもあろうすいかを、ゾウに与えたら食べるだろうか？」小学生たちと討論したことがある。「鼻でたたいて割って食べる…」「大き過ぎるので食べない」「足でふみつぶして、小さく割ったものを鼻で持ち、口に入れて食べる」などと意見が分れた。実際に何頭かのゾウに食べさせて、その様子を一同で見学したのである。

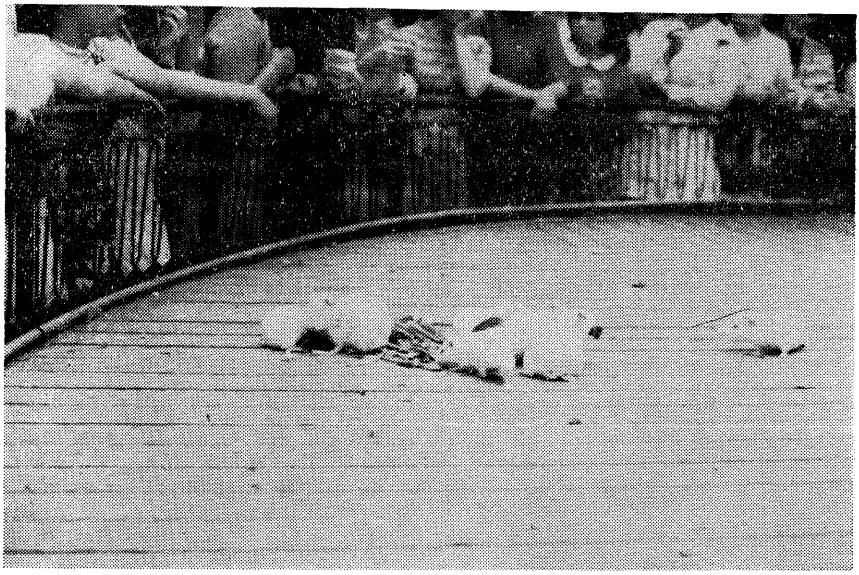
当のゾウは足でつぶして食べたので、予測した意見の合った子は大喜びをした。ところが、別の生まれて間もなくから人に育てられたゾウの場合は、鼻でしばらくかいだり触れただけで食べようとはしなかった。何回かくり返した末、係員がすいかに切れめを入れてやり、中味にふれられ、しかも割り易すいようにして与えた。それでも、鼻で中味をいくらか吸い込んで食べはしたが、丸のまま与えたときのようにそれ以上食べる様子は示さなかった。味を知らないためかと思い、割って与えたら、いかにもうまそうにきれいに全部食べ、もっと欲しいような素振りを見せた。横にもう一個丸のままがあるのに……。

ゾウはわらを好んで食べるが、根元のかたいところを特に喜ぶ。鼻でつかみ、前足ではたくようにして、わらの切口を床に立ててそろえ、口にくわえ、鼻で根元に残っているやわらかい葉をしごきとり、もう一度鼻で持ち変えてかみちぎり、茎の上の方を床に落とす。こんな食べ方をしながら、一晩に二十キログラムものわらを食べている。

すいかを足でつぶして食べたゾウはわらさばきも巧みである。すいかをひとりで食べなかったゾウはわらの食べ方も能率が低い。えさの食べ方一つを見ても、生活の知恵がにじみ出ているようでおもしろい。

飼育係の者は、動物舎の錠を二十個ほど腰にぶら下げている。動物舎で作業をする場合、直ちに使用できるし、ポケットの中に入れたのではじきにポケットが破れてしまい、紛失する公算が多い。腰にぶら下げているのがもっとも能率的だからである。ところが飼育係が歩く段ともなると、錠がちゃらちゃら鳴って極めてリズミカルである。飼育係が来ることは、食事やいっしょに遊んでもらえる、動物にとって喜ばしい時ばかりとはかぎらない。場合によっては、押え込まれて予防注射をされたり、小さな箱の中に追い込まれて引越しを余儀なくされたりもする。動物も時間がある程度わかるので、都合の悪いことの起こりそうな時間に飼育係が数人集まって檻の前を通ると、眠っていたものも起き出し、檻に足をかけ背のびをするようなことをする。表情もまた日ごろとは違っている。

錠束の音に動物が敏感なので、えさを与える際、日に数回、多いときには十回にも分けて与え、その都度錠束を鳴らした。強い日照りを好まぬモルモットであるが、錠束の鳴るたびに返事をしながら集まるように条件づけられた。鳴き声は大別して三種類はあるし、歩行の仕方、えさの見つけ方などあわせて知る結果にもなった。どの時間は集まりが悪いとか、何度もしている中に、動物の方の動作がある程度予測できる結果になった。現在はめすのグループがやっと集まる段階になったばかりでもあり、集まる時間が多くかかるので、団体で来園する園児などに実演して見せる



場合、途中から園児に錠束を鳴らしてもらうようにしている。通称「モル寄せ」は以前にも増して好評のようである。

動物の行動もある程度予測可能なのと同様に、動物にふれあう子どもの行動も予測可能である。品物等の静物とは異なり、行動する要因は複雑である。人間もさることながら、動物も生命あるものだから、やはり複雑な要因が支配していることは当然である。子どもと動物両者のふれあいともなると、極めて複雑でむずかしい。しかしある程度の予測はやはり可能であるし、そのつもりで対処すればできない相談ではない。

「○○ちゃんは動物に△△しかできないと思う……」このような言葉をよく耳にすることがある。動物とふれあう子どもの行動をさらに分析して、子どもと動物の接点、軌跡いや四次元の世界であるふれあい、その幅を増すよう努力してゆきたいと考えている。子どもと動物のふれあいは、単に教材としての動物では片づけられぬ意義をもっている。自然を畏敬するところから生まれる、人の心のもち方にも及ぶことであろう。生命があり、相手も動く動物なるがゆえに、子どもたちにとってもっとも手近な人間理解の出発点であると思う。その意味で一人でも多くの子どもたちと動物とのふれあいが深められてゆくよう願ってやまない。

（上野動物園）

こども動物園で

青木秀子

五月二十二日の午後、上野の子ども動物園での研究会に参加させていただいた。私にとってそれは、動物飼育にとどまらず生きた保育理論を学ばせていただけた会であった。

この日、動物園の近くに来ると、五月のさわやかな風とともに、昔と変わらない大ぜいの子どもが、おとなに手をひかれ寄って来る動物園のふんい気があった。しばらくそれにひたり、ちょうどチンパンジーが芸の練習をしているのを見ることから、遠藤先生のお話が始まった。

動物飼育は、神経を使いすぎず、そのポイントをおさえてすれば決してむずかしくはない。そのポイントとは、①栄養を十分に与える。②その動物の動きをよくとらえる。③人も動物も健康管理をよくする……などであった。

しかし、お話は単に動物を飼育することにとどまらず、暗に私たちが子どもを保育する場合と同じ法則のようなものを教えられ、考えさせられた。

チンパンジーの芸（つな渡り、タンバリンをたたくなど）に対し「あれは別に特別なことでなく、彼らが日ごろしている動きに、少し手助けをしただけなんですよ」とおっしゃる。「芸が終わるとあそこ（舞台）で遊ばせてみてそれに遊具を入れたりして芸にもっていくのです」

「動物の抱き方は、一番楽な姿勢、すなわち寝姿で決めるのです」ともいわれた。私たちが保育する時も、子どもの遊ぶ姿、子どもの本来の生活の姿から出発する、そのことと同じである。子どもの

動きを見て、どういうことに興味があり、どういうことができたりするかわかってくる。また、こちらの働きかけ方も、子どもの自然の姿の中に折り込まれていくべきことにも及んでいくと考える。

そして動物の日ごろの動きをよくとらえるには(飼育ポイント②)「小さい箱の中に入れていてはわからない。また一匹だけだと動きは制約される。二匹にすると繁殖が見られ、さらに群にするとトラブルもおこり、いろいろな動きが見られる」とおっしゃった。これもそっくりそのまま、子どもの場合にもあてはまる。広い場所に子どもをおいたとき初めて、小さい部屋にとじこめ、さらに小さな何かをさせている時とは異なるいろいろな可能性が見えてくる。まさに保育の根源的条件の一つである〝空間〟の必要性を指摘されているようである。また「一人より大ぜい……」は幼稚園教育の存在理由をいっている。子どもの数が増すことで、空間の位置関係が変わり、そこでのエネルギーの方向が変わり、ぶつかりあって一人一人のいろいろな面が出てくる。つまり、子どもが子どもによって保育される、保育の大きな部分のことである。

子ども動物園を運営する立場から、園内を、(1)見る、(2)子どもが参加する、(3)休む、ということを考えてつくっておられるという。

そして「見る」という子どもの行動について研究をおもちで、「その動物に視線すら投げかけないでいる子どもを、見る意欲がないならとその場を離れさせようとすると離れない、ということがあったのです。子どもは見ていないふうでも見ているかもしれない。〝見ない〟も一つの見方」といわれた。私など毎日子どもを追っていて、よくぶつかる場面でもあり、そんな時、誤まった判断をしてきたのでは……とドキリとさせられた。子どもはからだでふんい気までも見る力をもっていることを、ここでも教えられた。

遠藤先生のお話を伺いながら終始感じたのは、先生がラマなど動物を育てられた経験を話される時のあの明るいお顔、そして何でもない普通の言葉で話されるが、そこにある喜びと重み、である。〝生きているものを育てる人〟のもついきいきしさを見た気がした。動物の立場に立ち、また動物(自然)を求めてやってくる子どもの立場に立ち、命あるものがいきいきと生きることをたいせつに考えてくださる先生に、頭のさがる思いである。そしてもっともっと、こんな場とこんな方々のふえることを願っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

短大における保育者養成

原口純子

一　はじめに

真に子どもをすばらしいものだと思い、子どもと共に生活することに喜びを感じ、子どもと呼吸をぴったり合わせながら、彼らに精一ぱい充実した、楽しい生活を展開させることのできる、意欲的な保育者はどのようにして育てることができるでしょうか。保育については全くのしろうととして入学してきた学生が、全身に保育者のふんい気をただよわせ、自分にこれからゆだねられる幼児のために、いささかの不安を感じながらも、意欲にみちあふれて卒業していくようになるために、その二年間の課程と時間の中で養成する側は、何をどのようにしたらよいのでしょうか。

ここ数年間、短大の増設に伴い、保育者を養成する短大が大きくふえ、毎年数多くの有資格者が世に送り出されています。彼女たちが年間三十～四十人の子どもたちに日々直接間接に多大な影響を与えていることを考えるとき、資格を出している養成校の責任はきわめて重大なものと思われます。

また、今日の問題として、従来であれば、保育者の養成校には、保育者になりたい、と初めから志をもって入学してくる者が多かったのに対して、最近では、特に都市部の短大においては、必ずしもそうではない学生が多く入学してくる実情にあります。つまり資格は将来の万一に備えて一応は取りたいが、保母や幼稚園の先生になるつもりはさらさらなく、未来の母親として幼児教育についての知識と理解を身につけたいという者、あるいは全く無目的の者が多くなってきているのです。このようなさまざまな学生が、もし、資格はいらない、保育教養のみでよいというのであるならば、それなりの教育方法が考えられるのですが、資格を修得して出るということであるならば、入学時の意識がどうあろうと、保育者として、実践者としてふさわしい情熱と能力をもつ者に養成しなければならないのです。いいかえれば、資格を出す以上目的養成としての立場をとらなければならないのです。

短大の場合、二年間という制限時間内で、保育者養成の課程は

どのようなものであればよいのでしょうか。私は数年間、保育科の保育原理等を担当し、学生に接し、保育者養成のむずかしさを痛感しました。今、反省と自戒をもってそのあり方をあらためて探ろうとするものです。

二　現場に役立つ実践能力とは何か

目的養成というのは換言すれば、現場に出て役立つ能力をもつ者を養成したいということです。現場に出て役立つ保育者の養成ということを考えるとき、これは当然のことながら幼児教育をいかにとらえるかということと密接不可分の関係にあります。もし幼児教育を、先生が必要と考える知識やしつけを与えたり、歌やおゆうぎ、絵や製作をたくさん教えることであるという認識に立つならば、実践能力をもつ保育者の養成は、ピアノが巧みに弾け、歌や製作をたくさん覚え、また、子どもを静粛にさせる術も心得えたという人を二年間に養成すればよいのです。これは、実は幼児教育の本質を見失った時代遅れの考え方であると思われますが、現状において、ピアノや製作、リズム等の実技指導の時間が保育科の時間割の上でしめる比重の多いことを思うと、あながち前時代的ともいえないのです。

このような単純な「現場に出て役立つ保育者の養成」という考え方が悪循環を起こし、今日の保育者の養成をゆがめ、幼児教育そのものをゆがめてきたともいえましょう。

一方、幼児教育を、何かを教えるところではなく、園での生活全体から、すべての瞬間の先生と子ども、子どもと子ども、物と子どもの触れ合いや活動をとおして、精一ぱい充実できる生活を与える中で、全体としての成長を助長するという認識に立つならば、現場で役立つ実践能力をもつ人の養成は、おのずから技術やテクニックの教育ではないものが求められましょう。全生活の中で、子どもを真に尊重し、人として育てられる保育者の養成こそ、すべての教科の担当者が真剣に取り組まなければならない課題といってよいでしょう。

三　教えること——育てること

ここで考えたいのは、二年間の間に、何を教えたらよいかという知識や技能の検討ではなく、いかにして保育者を育てたらよいかということです。つまり保育者を養成しようとして、保育についての意義や重要性、保育計画や指導方法等について教授しても、これらの知識の伝達によって保育について多くの知識と理解をもった人をつくり出すことはできますが、それは即、意欲的な保育者を育てることにはならないのです。このことは、多くの教育学者や保育学の先生が即、よい保育者ではないことからも理解されます。保育の知識や技術を与えることと、保育者を育てることとは必ずしも同じではなく、むしろ違っているというほうが妥当なように思われます。養成する側は保育者を育てたいのです。知

識も技術もそのための媒介手段で、それらの教授や伝達が目的ではないのです。しかし、媒介手段として与える知識すら、保育が行為であり、個々の教師と子どもとの全生活をとおしての具体的なかかわり合いの中に初めて成立し、意味をもつことを考えると、さまざまな抽象的な言葉が頭の中を空転するような教育は意味をもたないことに気づきます。

たとえば、「子どもを尊重する」「自主性、自発性、創造性を育てる」「許容的な態度」「子どもを理解する」これらの言葉を学生は言葉で理解し、説明することもできるのです。しかし保育の行為として具体化することができていない。つまり、それらは単なる一片の知識であって、ほんとうに身についたものとはなっていないのです。これらの言葉は知らないよりは知っている方がいいにきまっていますが、言葉として知っていること自体は大して重要なことではなく、むしろ、「子どもを尊重する保育」などという言葉を知らなくても、一人一人の子どものよさを見いだし、いやな思いや、失敗感をもたせることなく、たのしく充実した保育ができれば、むしろそれでよいともいえるのです。保育の個々の場面の中でどのように対処するかが、知識としてでなく、身についた行動とならないかぎり、言葉が言葉として空転し、実質を伴わないのであって、それでは何も知らないことと同じことであるといっても過言でないと思われます。

もとより学校で教えうる知識の範囲などはごく限られたものであり、また、たとえどんなに微に入り細にわたって話したところで、学生が現場に出て当面する問題はもっと広く複雑で、学校ではいくら教えたつもりでも、学生は役に立たないことばかりを学んだことになります。とするならば、短大で養い育てなければならないのは、しっかりした幹で、それさえしっかりしておれば枝葉のことは自分で立ち向かっていけるはずであり、またそうなるように指導しなければなりません。

四　心情、理念、子どもの理解

二年間の在学期間中に本当に養い育てたいしっかりした幹とは、いうなれば、保育者としての心情と、保育理念と、子どもの理解ではないでしょうか。

学生が保育者らしく育つ、または保育者として成長するということはどういうことでしょうか、それは、保育に興味を感じ、意欲をもち、保育者としての意識が育ち、心情が育つ過程とはいえないでしょうか。いいかえれば、現状では月給こそめぐまれないが、保育はほんとうにいい仕事だ、楽しくやりがいのある仕事だと一人一人が思い、そして一人でも多くの子どもに幸せな幼児期を過ごさせるために、自分はよき保育者になりたいと思う心の育つ過程なのです。各科目の先生方がおのおのの担当科目をとおして、それらを育てていくことが必要ではないでしょうか。と同時に、どういう子どもを育てたいと思うか（児童観）、どのような

保育が望ましいと思うか（保育観）ということを基本においた、借りものではない保育理念を形成することだと思います。

そして何より大切なことは、子どもをよく知ることです。しかし子どもをよく知るということは、児童心理の概説書に書いてあるような、「情緒の発達段階は」とか「子どもの社会性の発達は」などというような書物の上での、いわば抽象的な知識として知るということではなく、生きて、生活する子どものいぶきのようなものをじかに感ずることです。それは、たとえば、怪獣ごっこに興ずる子どもの姿から、あるいは「お花に水をあげてちょうだい」といったら、チューリップの花の中に水をみたして来た子どもの姿から、あるいはまた「先生、見てて、ボク鉄棒ぐるってまわれたの」と目を輝かせてとんで来る子どもの姿から、子どもの発達や生活を理解することなのです。

五　保育者の養成は保育行為である

「育てる」ということは、対象が幼児であれ学生であれ、その本質はあまり変わらないように思います。保育者の養成こそ、保育行為ではないでしょうか。

イ　学生の気持を理解して

保育者はまず子どもの気持を理解し、受けとめ、子どもと呼吸を合わせて、彼らの興味や要求、心情をくみとり、それにふさわしい言葉をかけ、活動を提供します。

同様のことが保育者の養成についても要求されます。もし、学生の気持や関心、意識などに全くかまわずに教師が勝手なペースで講義を進めても、身についたものとはならないでしょう。まず学生の気持をよくとらえ、教師が学生の心情に呼吸を合わせなければならないように思われます。たとえば、入学当初の学生は、幼稚園の先生になりたいと思ってくる人、子どもが好きだからという人、なんとなくきた人、他の希望がかなえられずやむなくきた人というように入学の動機も、関心もバラバラです。しかし、どういう動機から今彼女がここにいるかということは、さして問わなくてもよいのです。大切なことは、今、ここからスタートすること、そして彼女たちがどんなに意義のあるところにはいってきたかを述べ祝福し、興味と希望を与えることなのです。

それは、子どもの世界のすばらしさを実感させることであり、保育することの喜びを知らせることでもあります。また、学生の意欲の高まった次元では、それに答えるだけの課題なり、講義の内容をもたなければならないし、実習等で張り切ってやったのに失敗して自信を失った学生には、その失った自信のところから、ともに歩まなければならないのです。

ロ　興味と意欲をもり立てる

まず、学生が、子どもはすばらしい、保育はほんとにやりがいのある仕事だと思わなければなりません。そのためにはまず教師自身が、生き生きとした保育と、子どもの実態をよく知り、心か

ら保育をすばらしい仕事だと思っていることが必要です。

保育理論の概説書の数は非常に多く、それらのどれも保育の意義や重要性、歴史、子どもの発達、指導の原理、保育内容などについて述べているのですが、そのうちのどれ一冊を読んでも、保育の具体的なイメージや子どもの姿は浮かび上がらず、そうだ、保育者になってみたいという興味も意欲もわいてこないということが、大へん残念なことですが実情であるように思います。

ではなぜそうなのでしょうか。それは、要するに、「生きた子ども」から離れている議論にすぎないからではないでしょうか。保育を子どもから離れた次元で語ると味わいのないものになってしまうのです。できればどの場面にも生きた子どもがとび出してくるような、そんな実感が欲しいのです。そのためには、さきに述べたように教師自身が、保育のすばらしさ、楽しさを身をもって実感していることが必要です。そこから生まれる教師自身の新鮮な驚きや感動が学生の心に響き、学生の保育への興味や意欲をかき立てるのです。

したがって教師は、文献による研究も必要でありましょうが、まず現場に出て、子どもと子どもの生活、生きた保育をとらえることが大切に思われます。なおその他の具体的な方法として、たとえば、スライド、八ミリ、観察記録のプリント、サイコドラマ、見学、実習などは有効な方法であり、また、絵本や童話、人形劇、ゲームなども保育への興味をかきたてるものとなりましょう。

ハ　先生と学生の結びつき

保育者は、真に子どもを愛し、可能性を信じ、理解し、許容的かつ受容的でありたいと言葉で教えるよりも、保育者を育てようとする教師こそ、まず学生を愛し、一人一人のよさを見いだし、可能性を信じ、多少じれったくても、腹が立っても受けいれ、待つ心をもって接していきたいものだと思います。

もし学生自身が、先生に心にとめてもらえているという自信をもち、受けいれてもらえた心豊かな経験をもつならば、他人と接するとき、幼児を保育するとき、知識としての受容ではなく人柄としての受容ができるのではないでしょうか。よい教育効果を上げようときびしくすることも大切なことですが、それが著しく学生の気持を傷つけたり、とんでもない苦労をするはめにおとし入れ、学生が、保育だけはこりごりだ、孫子の代まで保育だけはやらせまいと決心させるような経験をさせては、人を育てることにはならないのです。

教師と学生の人間関係を大切にしながら学生を保育する、というふうに考えると、保育者の養成は大量生産のきかない、ハンドクラフトに属する課程ではないかと思います。同一の型をドスンとプレスして保育者をつくるわけにはいかないのです。名前も覚えきれないほど数が増すことは望ましいことではありません。

二　生活性

人を育てるということは、どうやらあまり科学的でも理論的で

もない、不合理な部分の多いものではないかと思われます。すかっと割り切れない、どろくさくも人間くさい、少々ルーズな、そんな部分のあるもののように感じられます。それだけ複雑な過程ともいえましょう。一見無駄な、能率の悪い生活性のようなものの中に案外人間を育てる要素があったりするのです。

それはしばしば、幼児教育の実際の場面の中に見いだすことができます。また、それとは逆のことが、幼稚園における保育の科学的分析の研究などをみるときに感じられます。保育効果をあげるための保育の科学化や構造化は、子どもを本当に幸せにしているでしょうか。たとえば、ある保育を観察し教師の有効な働きかけについて分析した結果、有効と思われる項目が、かりに十五項目あがったとしましょう。しかし、他の教師が、その有効そうな十五項目をまっとうすれば、望ましい保育ができるといえるでしょうか。もちろんそれが可能な面もないわけではありませんが、答えは否ということになるでしょう。なぜならば、状況もちがえば、パーソナリティーもちがう人間に、同一の効果を期待することはできないからなのです。それほど保育は直線的、単純明快なものではないのです。保育は説明のつかない、証明もされがたい、科学のあみの目にはひっかからないモヤモヤした、一見無意味そうな動きや、先生と子どもとのつながりの中にある、とはいえないでしょうか。

同様に、保育者を養成する課程は各講座の必要単位の履修だけにあるのではなく、二年間の全生活の中にあるのです。桜が咲けば、花見に行っておだんごを食べ、花壇に花の種をまき、花を育て、花をめでる、時には人形劇大会をやり、クラスコンパをする、先生も学生と語り共に遊びお茶ものむ。見学旅行に出たり、討論合宿をする、というように日常生活やさまざまな行事をとおして、何より学生一人一人が、大げさにいえば生きる喜びを感じ、保育科はすばらしいと感ずることが大切なのです。

六　むすび

本稿では、保育とは何か、教えることとは何か、保育者を養成するということは、どのようなことであるのか、という根本的な点に立ち返って、保育者養成という問題について考察を試みてきました。保育とは、要するに「生きている子どもを人として育てる」ということであるといってよいでしょう。したがって、保育者を養成するためには「育てる」ということ、「生きている子ども」という二つの要因を離れて論ずることは不可能であるということになります。本稿は、この点に焦点を合わせて論じたものですが、その議論は一見、すでにわかりきったことであるという印象を与えるかもしれません。しかし保育者養成の現状をふり返ってみると、本稿の議論は決して自明ではないといってもよく、保育ということの根本を問い返すことも、あながち無益なことではないといってよいでしょう。

（旧姓　綾部）

今月は、障害をもった幼児に関する記事が多く掲載してあります。

田口恒夫氏はお茶の水女子大学で言語障害を専攻しておられ、幼児保育の理解者です。障害をもった幼児というと、何か普通の子どもとは違った特別な種類の子どものように考えられがちです。そうして、普通の幼稚園には入れてもらえない傾向があります。しかし、保育の観点からいうならば、普通の子どもと同じ感覚でつき合うことのできる子どもたちであり、子ども同士の間では、何ら差別意識なく、あたりまえに仲間になれる者同士です。最近の幼稚園は、ある水準以上の子どもだけを対象として、それ以下の子どもは入れない傾向がありますが、それでいいでしょうか。

最初は、幼稚園の諸条件からいって、指導しやすい子どもだけを入れて、それ以下の子どもを落とすのは、やむを得ないことだといわれてきました。ところが、次第に、ある水準以下の子どもを幼稚園に入れると他の子がめいわくする。このような子どもは一まとめにして別の種類の教育をすべきだというように、理くつがついてきます。そして親子ともども、優越感と劣等感が生まれてきます。今回の中教審の答申が実際に移されたとき、この傾向がますます助長されるのではないかと案じます。中教審の問題については、まだ発表されたばかりでくわしいことはわかりませんが、次号以下で扱ってゆくつもりでいます。

倉橋惣三選集第三巻（フレーベル館発行）の折り込みのパンフレットの中に、「はいれない子にも薫れや梅の園」という句の色紙が写真版でのっています。入れてやらないのは当然だ、むしろ入れるべきではないという議論とは、何と対照的な心でしょう。幼児教育は初心にかえって、この問題を考え直すべきでしょう。

……

時間と空間の問題を、いろいろの角度から扱っていますが、今月は理論物理学者として、第一線で活躍しておられる柳瀬睦男氏に書いていただきました。幼児教育とどこで結びつくかを考えてください。

（津守）

幼児の教育　第七十巻　第九号

九月号　©　定価一〇〇円

昭和四十六年八月二十五日印刷
昭和四十六年九月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼発行者　津守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所　凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所　株式会社　フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

子どもたちは、カセット童話の主人公とすっかりなかよし!!

● めがねをかける
らいおんなんて、
かっこいー。ぼ
くも かけたいな。
おさるのおしり
とかおが あかい
のどうしてか、
わかっちゃった。

東京・ゆかり文化幼稚園
鳥海憲君
第1巻
ライオンのめがねをきいて

● みずにうつった
うしかたを たべ
ようとするなん
て やまんばは、
ばかだなあー。
でも、わるいや
つが やっつけら
れてすーとした。

千葉・柏めぐみ幼稚園
藤島孝君
第2巻
牛方と山姥をきいて,

絵本が語り、カセットが語る世界の名作童話

ポニー ギンダー カセット　**第1期・全3巻**

世界の名作童話

■アンデルセン・グリム・ギリシャ神話・世界の民話・日本の代表的作家の作品・日本の民話などから、第1期は18話を厳選し、全3巻にまとめました。各巻とも6話ずつで、豪華な絵本とカセットテープ3本が楽しいパッケージに収められています。

第1巻	裸の王様、ライオンのめがね、白雪姫、三匹の子ぶた、泣いた赤鬼、ものぐさたろう
第2巻	人魚姫、ノアの箱舟、ヘンゼルとグレーテル、ジャックと豆の木、注文の多い料理店、牛方と山姥
第3巻	ハメルンの笛吹き、太陽の馬車、親指姫、狼と七ひきの子ヤギ、手ぶくろを買いに、雪女

声　藤村有弘　天地総子　中村メイコ　小山田宗徳　小池朝雄　他

この「世界の名作童話」は、フレーベル館とポニーの共同企画・共同発売です。

定価　各巻5,700円
● 3巻1セット17,100円

※園児のご家庭にも、ぜひおすすめください。ご家庭でご購入の際、3巻1セット一括お求めの方に限り、月払いの制度もございます。

1時払い1セット17,100円　月払い(6回)
初回 4,100円　2回以降 2,600円×5回

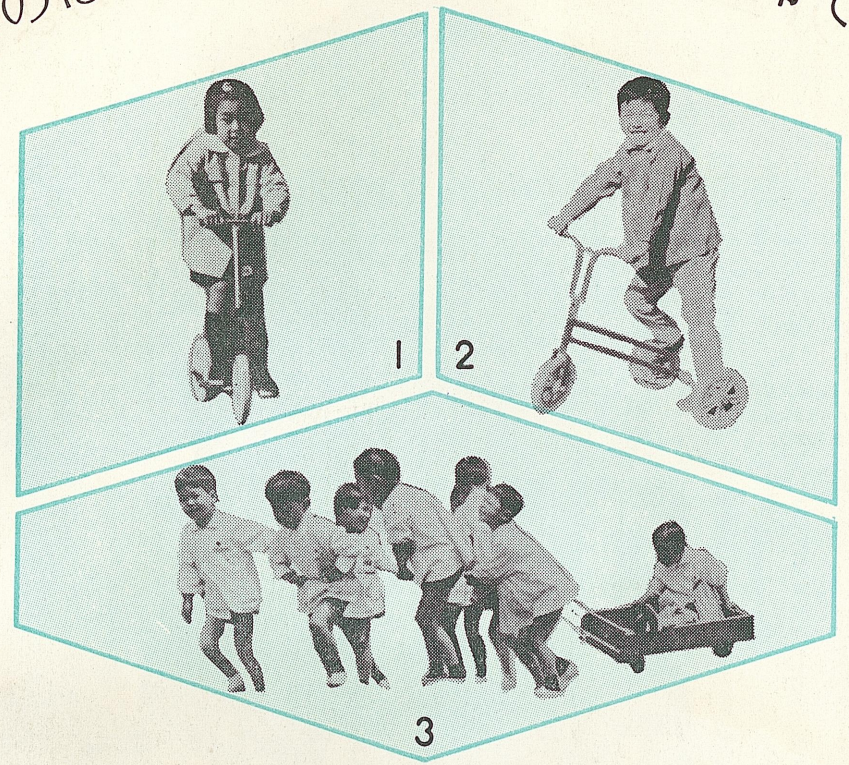
※カセット童話は日立のカセットテープレコーダーで…フレーベル館推薦

おときち君	255	13,900円
おときち君	280	17,800円
おときち君	232S	32,500円

月払いの制度もございます。詳しくはカタログをご請求ください。

株式会社 フレーベル館

秋のはじまり‥‥遊具の変わる季節です



1. キンダースクーター

バランスを上手にとると、軽快にスイスイ走る二輪車です。
全身を使って元気に走らせれば脚力、腕力を養うので楽しい遊びの中で健康増進に役だちます。
小型ですから、狭い園庭でも自由にカーブが切れるので遊びの行動範囲が拡がります。
車体は鉄製でそれに丈夫なタイヤがついていますから、いつまでも楽しく遊べます。

規格　たて77cm・よこ23cm・高さ66cm

3,200円

2. 立ち乗り三輪車

三輪車の遊び方をダイナミックなものにしました。
いままでの三輪車とちがって、座って漕ぐのではなく、立って漕いで遊びます。
前進も後退もでき、それにハンドルで右へ左へ自由自在に走らせることができる楽しい乗りものです。
車体は鉄製で、丈夫なタイヤがついています。

規格　たて72cm・よこ55cm・高さ65cm

5,500円

3. キンダーワゴン

ワゴンは、人が乗ったり、物を運んだりできるので活用の仕方には幅広いものがあります。
2人が乗っても充分な広さですそれを皆で押したり引いたり多くの人が楽しく遊べます。
重心が安定していますので安全な車です。
車体は丈夫な木製で、引っぱるためのロープがついています。

規格　たて86cm・よこ40cm・高さ23cm
箱の深さ13cm・ナイロンロープ400cm

6,500円

株式会社 フレーベル館